喜子川遺跡

―発掘調査報告―

1988年

―喜子川遺跡調査団―

序

喜子川遺跡の調査は，奄美の先史時代を解明するのに重要な役割りを果すものでした。「教育・文化の町」づくりをめざしている本町にとって，また，文化財保護対策を図る上からも重要な意議があったと思っています。

喜子川遺跡の発掘は，財団法人高梨学術奨励基金の援助を受けて行なわれたものでありますが，沖縄・鹿児島・熊本・東京等の考古学の専門の方を始め，若い研究者や学生諸君が炎天下の中を，奄美先史時代解明のため熱心に調査され，短期間で多くの成果をあげられたことに対し厚くお礼申し上げます。

しかし，本調査に参加を願望されつつ，その直前，昭和62年６月に急逝された東京大学名誉教授・元青山学院大学教授三上次男先生の霊に哀悼の意を捧げ，はるかにご冥福をお祈り申し上げます。

発掘期間中は地元の方にお世話になりました。また，鹿児島県考古学会長河口貞徳先生・沖縄国際大学学長高宮廣衛先生・熊本大学教授白木原和美先生には，直接現場でご指導をいただきました。地質鑑定では奈良教育大学教授西田史郎先生にあたっていただきました。紙上ではありますが厚くお礼申し上げます。

最後に本報告書が文化財に対する認識の向上と，理解に役立つことと，学術研究上の一助ともなれば幸いです。

昭和63年２月26日

笠利町教育委員会

教育長　染　　光　義

例　言

1．本概報は，喜子川遺跡調査団が高梨学術奨励基金の補助を得て，昭和62年度に実施した喜子川遺跡の確認調査概報である。

2．調査の組織は経過の中で記してある。

3．現地において河口貞徳氏（鹿児島県考古学会長），高宮廣衛氏（沖縄国際大学学長），白木原和美氏（熊本大学教授）の指導を受けた。土層分析については西田史郎氏（奈良教育大学教授）に依頼し，玉稿をいただいた。厚く謝意を表したい。

4．本書の遺物番号は，全て通し番号とし，遺物番号と本文中の番号は同一である。

5．現地での実測は調査員，調査補助員全員で行い，現地での写真は手塚と中山が担当し，出土遺物写真と実測，整図は中山が担当した。

6．本書で用いたレベル高は崎原集落近くにある基準点から引いてきたものを使用した。

7．本書の執筆及び編集は田村，中山が行った。

第1章　位置と環境

喜子川遺跡は鹿児島県大島郡笠利町土盛字喜子川にある。

大島本島は300～400mの山陵をもち，奄美諸島のなかでも特に険しい地形をなしている。一見山ばかりの地形である。海岸線は出入が多く，しかも山裾から急激な崖をなして直接海に没している。大島本島の大半がこのような地形をなしているのに対し，喜子川遺跡の立地する笠利半島は全体に地形が緩やかで，低い台地を形成し，200m足らずの大刈山と定山が半島を東西に分けている。

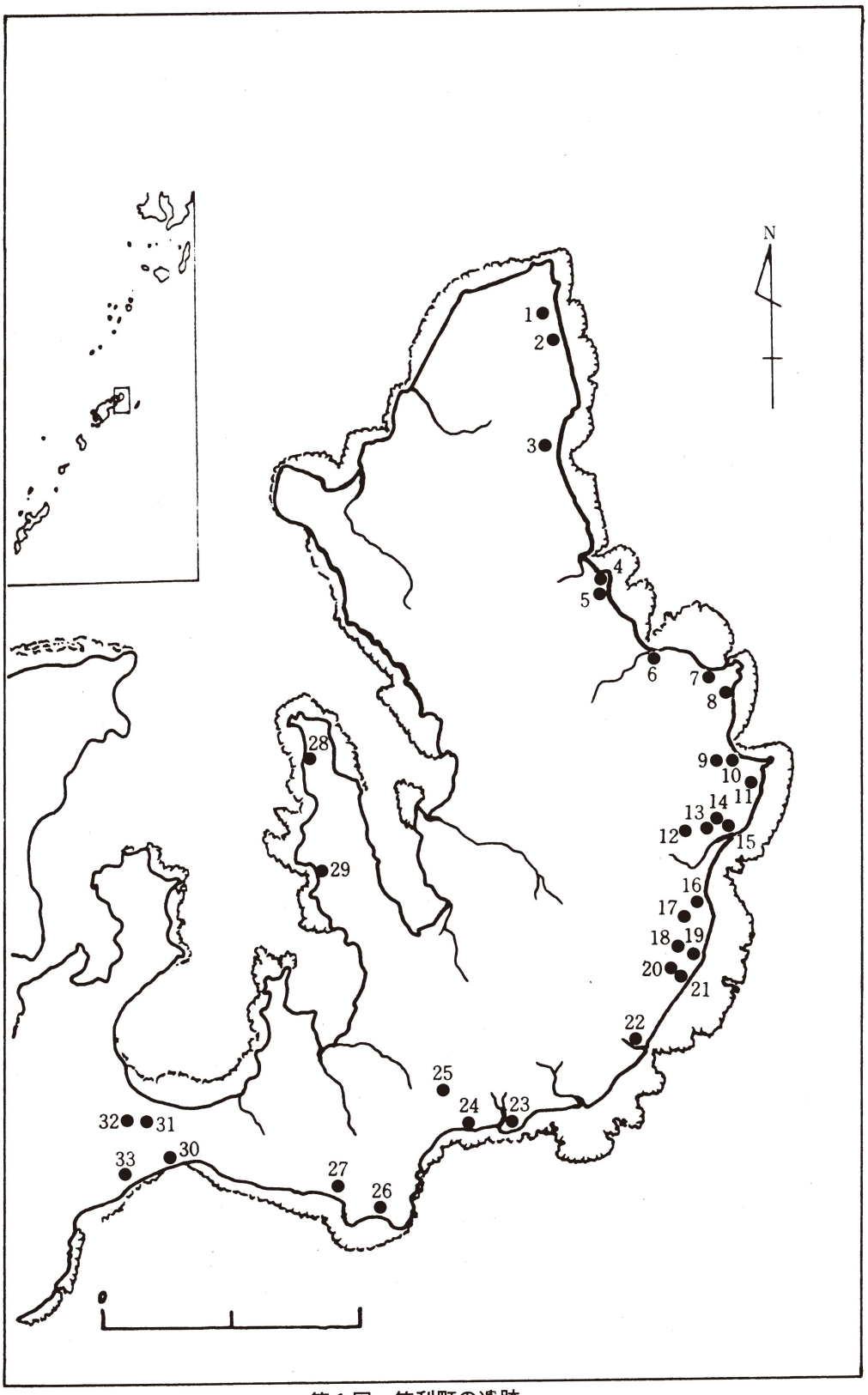
西側の笠利湾にのぞむ地域は海岸の屈曲が激しく，丘陵が海岸にせまり，大島通有のリアス式海岸をなしている。遺跡の数は少なく，発掘調査が実施されたのは，昭和53年に発掘されたサウチ遺跡[注1]のみである。その他には鯨浜の遺跡散布地が知られるにすぎない。サウチ遺跡は砂丘上に形成された遺跡で，生活址や埋葬址が発見されている。また，種子島の広田遺跡と同類の貝符も採集されており，奄美に弥生文化が入っていたことを証明した遺跡でもある。

半島の東側は西側に比べて平坦で，海岸線も単調で出入りが少ない。従って砂丘や珊瑚礁の発達が著しく，遺跡の立地に適している。このため半島最北端の用岬から半島基部の加世間まで大小の砂丘にはほとんど遺物を検出することが出来，その大半が遺跡であると言っても過言ではない（第1図)。奄美の土器標式名にもなっている宇宿貝塚をはじめ，乳房状尖底土器の完形品と爪形文土器を出土した宇宿高又遺跡[注2]，弥生時代の人骨を三体出土した宇宿港遺跡[注3]などが発掘調査されており，これらは，いずれも喜子川遺跡から約2キロメートル南に立地する。喜子川遺跡の北側にはあやまる第1，第2貝塚が存在しており，あやまる第2貝塚は昭和59年に発掘調査が行われている[注4]。コビロ遺跡では土器の底部に葉痕を有する土器，兼久式土器を出土している。辺留窪遺跡からは青磁や類須恵器などを検出している[注5]。その他に用遺跡，用長浜遺跡などが知られている。東海岸側に存在する遺跡は縄文前期からグスク時代にかけての遺跡が多いが，いずれも小規模なものである[注6]。

喜子川遺跡のある土盛地区では土盛遺跡，松ノト遺跡，崎原遺跡などが土地開発によって発見されている。笠利町の東海岸の遺跡は現在の県道を境として海岸線側に位置する遺跡と県道より，山手に位置する遺跡に分けられ両者は時期的に異っている。前者には弥生時代～グスク時代の遺跡が多く立地し，後者には縄文時代の遺跡が多く立地している。喜子川遺跡も道路より山手に位置している。

注1．笠利町教育委員会『サウチ遺跡』1978年
注2．笠利町教育委員会『宇宿高又遺跡』1978年
注3．笠利町教育委員会『宇宿港遺跡』1981年
注4．笠利町教育委員会『あやまる第2貝塚』1984年
注5．笠利町教育委員会『ケジ，コビロ，辺留窪遺跡』1983年
注6．中山清美「砂丘性小規模遺跡について」『ケジ，コビロ，辺留窪遺跡』1983年

番号	遺跡名	所在地	備考
1	用長浜遺跡	笠利町用長浜	
2	用遺跡	〃 用安良川	
3	辺留城遺跡	〃 辺留城	
4	辺留窪遺跡	〃 辺留窪	笠利町文化財報告№.6
5	コビロ遺跡	〃 須野コビロ	〃
6	あやまる第2貝塚	〃 須野大道	〃
7	あやまる第1貝塚	〃 須野	
8	マツノト遺跡	〃 松ノト	
9	喜子川遺跡	〃 喜子川	本報告書
10	土盛遺跡	〃 土盛	
11	宇宿港遺跡	〃 宇宿港	笠利町文化財報告№.4
12	宇宿貝塚	〃 宇宿大籠	笠利町文化財報告№.3
13	宇宿高又遺跡	〃 宇宿高又	笠利町文化財報告№.2
14	宇宿小学校遺跡	〃 宇宿	
15	万屋遺跡	〃 万屋	
16	万屋下山田遺跡	〃 万屋下山田	笠利町文化財報告№.6
17	万屋泉川遺跡	〃 万屋泉川	〃
18	ケジ遺跡	〃 万屋ケジ	〃
19	長浜金久遺跡第Ⅱ貝塚	〃 万屋長浜金久	鹿児島県教育委員会報告書作成中
20	長浜金久遺跡第Ⅰ貝塚	〃 万屋長浜金久	〃
21	ナビロ川遺跡	〃 土浜	
22	立神遺跡	〃 土浜	
23	土浜遺跡	〃 土浜	
24	イヤンヤ（ヤーヤ）洞穴遺跡	〃 土浜イヤンヤ	1973年三島格・永井昌文調査
25	明神崎遺跡	〃 用安入瀬	
26	用安遺跡	〃 用安入瀬	
27	赤尾木遺跡	龍郷町赤尾木	
28	ウフタ遺跡	〃 赤尾木ウフタ	熊本大学考古学研究室活動報告12
29	赤尾木保育所遺跡	〃 赤尾木	
30	手広遺跡	〃 手広	手広遺跡発掘調査終了報告
31	鯨浜遺跡	笠利町喜瀬	
32	サウチ遺跡	〃 喜瀬サウチ	笠利町文化財報告№.1


N
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33

第１図　笠利町の遺跡

第２章　調査の経緯

第１節　調査に至るまでの経緯

喜子川遺跡は1982年（昭和57年）に畑地総合開発事業で遺跡の断面が露出し，発見された。遺跡断面は上層が砂丘で最下層はマージ（赤土）層になっており，砂丘形成時の初期の頃と思われた。上層からは小片ではあるが爪形文土器が検出され，下層のマージ層からは焼石などが検出されていた。[注1] マージ層の中での遺物検出はきわめて興味を抱くものがあった。以来マージ層からの遺物発見を夢みる。その間奄美を訪れる学者や研究者達を必ず喜子川遺跡に案内して色々な教示を得る。1983年11月には沖縄県文化課岸本義彦氏が「南島考古だより」29号に爪形文土器を紹介している。[注2] そして地質を調べておられる成尾英仁氏も喜子川遺跡に案内し，土層について色々教示頂いた。この時黄褐色層についてアカホヤ層なのかＡＴ層なのかについて話し合ったが，その際はアカホヤ層の可能性が大きいとだけの見解が示されたのにとどまった。いづれの層であるにしても，奄美でアカホヤ，ＡＴ層の確認は初めてなるし，しかも爪形文土器の時期とマージ層に含まれる焼石等の遺物の時期設定に大きな影響を与えることになる。成尾氏はその後「アカホヤ層」であることが分析の結果あきらかになったことを電話で筆者に知らせてくれた。[注3]。そのことはマスコミにも取り上げられ，喜子川遺跡からアカホヤ層が発見されたというニュースは，南島を研究される方々の耳にいち早く届き，その問い合わせが当館に相次いだ。

その間，喜子川遺跡は発見されたままの状態になったが，地主から作物の植付けが出来ないので土の入れ替えを行いたいとの連絡が入った。地主の池田正美さんに遺跡の重要性と調査の必要性を話した結果現状のままで保存し，調査が行われるまで持って貰うことを承諾して頂いた。しかし発掘調査は予算も伴うし，町単独事業ではとても無理があった。南島で爪形文土器とアカホヤ火山灰層の関係を知る重要な遺跡である。何とか発掘調査をとのことで模索していた。昭和61年，南島調査の一環として青山学院大学の田村晃一教授が来島され，筆者はいつものコースで喜子川遺跡へ案内し，喜子川遺跡についての重要性を話していた。田村先生も爪形文土器とアカホヤ層の関係に大変興味を示され，また先生が調査されている南島とのつながりからも調査の必要性を述べられた。先生は東京にもどられて三上次男先生と話し合った結果，何とか確認調査でもということになり，高梨学術奨励基金に調査費の援助をお願いすることにした。幸いにして，この件は財団側の了解するところとなり，調査費を援助して下さることになった。

この遺跡の発掘はアカホヤ火山灰との関係を明らかにするという点で内外の研究者から注目されていることから，南島を研究されておられる方々に現場まで来て頂きたくさんの御教示を頂いた。発掘調査は炎天下の砂丘上で行われ，トレンチの中はさながらサウナ風呂様である。まさに調査員一同及び作業員の方々の熱血きわまる情熱で行われたとしても過言ではなかろう。発掘調査は1987年（昭和62年）８月２日から同年８月９日まで行われた。

第2節　調査の組織

調査主体者	喜子川遺跡発掘調査団	
調 査 団 長	笠利町教育委員会教育長	
調査担当者	青山学院大学教授	田　村　晃　一
	笠利町歴史民俗資料館	中　山　清　美
調　査　員	沖縄北谷町教育委員会	中　村　　愿
	鎌倉考古学研究所副所長	手　塚　直　樹
	青山学院大学講師	江　上　幹　幸
	熊本大学考古学研究室大学院生	藤　崎　周太郎
調査補助員	沖縄国際大学4年生	玉　城　安　明
	同上　　4年生	下　地　　傑
	同上　　2年生	園　田　淳　美
事務担当者	笠利町歴史民俗資料館	中　山　清　美
発掘作業員	前田篤志．里洋一．日高和昭．佐東人志．恵秋仁．尚師尚人．清エツコ	
整理作業員	牧野和美．坂山浩春．池田さゆり	

第3節　日誌抄

8月 1日(土)　江上幹幸女史東京より来島，中村愿氏他3名沖縄より来島。

2日(日)　現場へ器材を運ぶ，現場でのトレンチ設定の検討。

3日(月)　地形に合わせたグリッドを設定する。測量器具等を借用，トレンチの表土をスコップ掘りする。田村，手塚両氏夕刻到着。

4日(火)　第2層までは攪乱されており，遺物も面縄前庭式土器，爪形文土器，染物などが出土。B－4区，E－2の各グリッドを第2層まで掘り下げる。作業終了後現場にてミィーティングを終える。宿では遺物記録，調査日誌等を記入する。

5日(水)　C－2，E－2，I－2，G－2の各グリッドを調査し，第3層出土の遺物写真，図面を終了。遺物を取り上げる。土器はすべて爪形文土器である。調査員全員で土層の層位と色調の確認を行う。宿にて各担当からの1日の作業報告と問題点を出して貰う。

6日(木)　C－2．E－2グリッド第3層の調査を終了し，白砂層まで掘り下げる。現地指導の先生方来島される。マスコミ関係多数来現。現場がなんとなくあわただしくなって来た。写真，図面。

7日(金)　各グリッドの遺物は統一番号で取り上げレベルも同じ統一番号にする。アカホヤ層の下層を掘り下げる。土層断面は4面とも作成する。

8日(土)　E－2，C－2の各グリット土層断面図を終了する。アカホヤ層より下層でマージ層直上よりチップ2点出土。他は小礫が多い。礫は焼けているものが多い。にわかに古い時代を考えてしまう。調査終了前になり，調査員にも多少の疲労が見える。埋めもどし作業。

9日(日)　図面，写真を終了し，埋めもどし作業に入いる。器材かたづけ。

10日(月)　教育委員会へ調査終了報告をすませて発掘調査を無事終了する。毎日朝7時起床，8時現場。17時現場終了，19時夕食，21時ミィーティング，23時消燈というハードスケジュールの中での規則正しい生活であった。

調査員一同の奄美先史時代解明の情熱によって喜子川遺跡は大きな成果を残して発掘調査を終了した。

出土遺物は笠利町歴史民俗資料館において整理作業を進めた。また作業の進め方については田村晃一氏と連絡を取り合って進める。11月11日には中山が上京し整理作業中間報告を行い。2月8日には田村氏が来島され報告書作成について具体的な打ち合わせを行った。その後印刷原稿等の作業は2月20日ですべてを終了した。

注1．昭和58年，中山清美によって爪形文土器数点が遺跡断面に確認される。

注2．岸本義彦　「爪形文土器を求めて」『南島考古だより』沖縄県考古学会，29号，昭和58年11月。

注3．成尾英仁氏より電話連絡，その後昭和62年8月31日，第22回埋蔵文化財研究会鹿児島大会で発表されている。

第3章　層　　序

砂丘形成時の初期の砂丘でマージ層の上に砂丘がのっており，遺物包含層とマージ層までの層位的なつながりが注目される。これらは大きく８つの層に分けた。うち第４層は凝固のちがいからａｂｃ層に区別した。

第Ⅰ層　黒色砂層（表土）

第Ⅱ層　黒褐色砂層，遺物も出土するが磁器なども出土。まだ攪乱層である。Hue 2.5Y 3/2

第Ⅲ層　褐色砂層，遺物包含層である。Hue75YR 4/6。爪形文土器を含むが，土器片はローリングを受けた遺物が多い。層も南東から北西にかけてゆるやかに傾斜している。

第Ⅳ層　第Ⅳ層は砂の凝固度合からａ，Ｂ，Ｃ層に分けたが，砂の形状からすると同一層と思われる。

ａ層　Hue 25Y 1/7，灰白色砂層，無遺物層で砂粒子が第Ⅲ層にくらべて粗い。

ｂ層　ａ層とほぼ同じようであるが，砂粒子のブロックを含む（クール層）。

ｃ層　Hue10YR 6/3，にぶい黄橙色でｂ層と同様に砂粒が粗い。

第Ⅴ層　オリーブ黒砂層，Hue 5 YR 3/1。

第Ⅵ層　Hue 10 YR 6/8，明黄褐色砂層で砂層がやや水分を含んだ感じでフカフカした感触である。いわゆる「アカホヤ火山層」である。

第Ⅶ層　黄褐色砂層でかなり粘土まじりの層になる。

第Ⅷ層　Hue 10 R 6/8，赤橙色層。いわゆるマージ層（赤土）である。礫多し，チップ片２点検出。

西田先生から下記の報告文を頂いた。

さて貴重な試料をお預かりしたまま時日が経ってしまいましたが，分析結果をご報告申し上げます。

お送り頂いた試料は次の９点で，そのすべてをひとまず処理し，検鏡いたしましたが，火山ガラスの産出するのは1004試料すなはちＧ－２地点のＶⅠ層サンプルのみでした。

998	Ｅ－２：Ⅳ層	砂サンプル	
999	Ｅ－２：Ⅳ層	土サンプル	
1000	Ｅ－２：Ⅴ層	砂サンプル	
1001	Ｅ－２：Ⅶ層	土サンプル	
1002	Ｅ－２：Ⅷ層	土サンプル	
1003	Ｇ－２：Ⅴ層	土サンプル	
1004	Ｇ－２：Ⅵ層	サンプル	火山ガラス含有
1005	Ｇ－２：Ⅶ層	土サンプル	
1006	Ｇ－２：Ⅷ層	土サンプル	

1004についての分析結果は表１の如くで，その集計値は表２の通りです。以下では表２の平

均値を1004試料の代表値として使っていきます。

ＶＡＩＳ分析（Volcanic Ash Identificstion System）と名付けた既分析値と直接比較による結果ではアカホヤと同定されます。ＶＡＩＳでは今回３３８個の西日本を主とした更新世～完新世火山灰ガラスの既分析値と比較し，各元素ごとの差を計算し，試料ごとにその和を求め，小さい順に並べたものです。表５に出力された１０個の試料はすべてアカホヤに同定されるものです。

クラスター分析は先にお送りしました論文に示した１２種の更新－完新世火山灰の主成分組成値に今回の分析値を加え，標準化平方ユークリッド距離により最近隣法でデンドログラムを形成させたものです。元のデータは表４の通りで，最後列の１～１２＋？は試料名を表しています。？は1004試料です。

結果は図１の通りで，３：Ｋ０７６が最も近く現れていますが，２：１２とも近く，２：Ｎ００５はアカホヤです。３：Ｋ０７６＝ＢＢ１５で琵琶湖ボーリングでアカホヤの直下，オキ火山灰の上位とみられるので時代的には大きく異なる物ではありません。鏡下での火山ガラスの産出状況と形状からはアカホヤに酷似し，ＢＢ１５とは異なっています。

同封のグラフはＶＡＩＳで引いてきたアカホヤのプロットで，上下の泥炭層の^{14}Ｃ年代が出されているものです。ＡＫＡＨＯＹＡ／１００４は喜子川遺跡のものです。重ね合わせて比べてみて下さい。アカホヤにも層位により多少の組成差が表れますが，今回の1004試料とＮ 005はその差の大きい方になるかと思います。

結論としては，Ｎ1004＝アカホヤとして妥当であると考えます。考古学的な解釈は一切分かりませんが，爪形紋土器を考える上で良い手がかりを与えることができた様で，分析の仕甲斐があったと喜んでいます。

奈良教育大学教育学部地学教室
西田　史朗

表1　Date of printout: 05-NOV-87
DATA DISKET: EDX RAW #3

	SAMPLE	NA2O	MGO	AL2O3	SIO2	K2O	CAO	TIO2	FEO
1	1004-01	3.48	0.89	10.82	75.52	2.17	2.64	0.38	4.09
2	1004-02	2.69	0.95	10.78	76.45	2.30	2.70	0.39	3.74
3	1004-03	2.70	1.22	11.32	73.11	1.88	4.43	0.48	4.85
4	1004-04	3.87	1.08	10.74	75.38	2.25	2.64	0.38	3.66
5	1004-05	1.79	0.32	10.40	77.21	2.44	3.04	0.42	4.38
6	1004-06	1.80	0.34	10.37	76.98	2.42	3.16	0.44	4.49
7	1004-07	2.41	0.73	10.75	77.02	2.26	2.67	0.35	3.76
8	1004-08	1.96	0.77	10.63	76.92	2.38	2.79	0.40	4.15
9	1004-09	1.93	0.91	10.85	77.07	2.24	2.73	0.47	3.80
10	1004-10	3.32	1.25	10.98	75.72	2.14	2.65	0.41	3.54
11	1004-11	2.24	0.69	10.61	76.41	2.30	3.32	0.42	4.00
12	1004-12	1.98	0.72	10.65	76.83	2.31	2.92	0.41	4.18
13	1004-13	3.14	1.34	10.92	75.76	2.18	2.69	0.44	3.54
14	1004-14	1.54	0.32	10.51	77.23	2.41	2.98	0.47	4.54
15	1004-15	2.65	0.48	10.52	75.74	2.27	2.71	0.42	5.20
16	1004-16	2.89	1.10	10.99	76.56	2.14	2.36	0.33	3.63
17	1004-17	2.82	0.98	10.87	76.32	2.24	2.66	0.37	3.74
18	1004-18	2.07	0.73	10.89	75.41	2.17	3.45	0.48	4.80
19	1004-19	4.00	1.23	10.96	74.52	2.11	2.78	0.35	3.83
20	1004-20	3.76	1.23	11.06	75.46	2.03	2.57	0.35	3.53

表2　TEPHRA IDed: _____

ID: 1004　　SAMPLE: KISHIKAWA SITE/G2-VI LAYER
DATE : 05-NOV-87　　DISKET: EDX RAW #3
RECORD No. 1 ~ 20　　N = 20

	NA2O	MGO	AL2O3	SIO2	K2O	CAO	TIO2	FEO
Minimum	1.540	0.320	10.370	73.110	1.880	2.360	0.330	3.530
Maximum	4.000	1.340	11.320	77.230	2.440	4.430	0.480	5.200
Range	2.460	1.020	0.950	4.120	0.560	2.070	0.150	1.670
Mean	2.652	0.867	10.731	76.081	2.232	2.895	0.408	4.073
Sum of sqs.	10.711	1.995	1.057	20.314	0.357	3.797	0.040	4.595
Variance	0.536	0.100	0.053	1.016	0.018	0.190	0.002	0.230
Std. dev.	0.732	0.316	0.230	1.008	0.134	0.436	0.045	0.479

LOC._____　　SCATTER DIAGRAM _____
_____　　STD REGIST.DATE _____
HORIZON _____　　REGISTERED STD NO. _____
COLL.BY _____　　REMARKS _____

REFRACTIVE INDEX　RANGE Max. _____　Mode
Min. _____　_____ (=Nd) _____
Mean _____ Std._____　GLASS TYPE _____

表3

H　Dendrogram　(nearest neighbor method)

```
6000 '
6010 '    DATA  LATEST PLEISTOCENE-HOLOCENE VOLCANIC GLASS STANDARD
6020 '
6030  DATA 13                : ' number of cases
6040  DATA  8                 : ' number of variables
6110  DATA  1.85, 0.55, 10.14, 80.78, 2.33, 2.17, 0.20, 1.99:' 1:N430
6120  DATA  2.61, 1.37, 11.44, 76.13, 1.96, 2.39, 0.39, 3.73:' 2:N005
6130  DATA  2.02, 0.87, 10.30, 77.97, 2.34, 2.40, 0.40, 3.71:' 3:K076
6140  DATA  3.30, 0.79, 15.53, 67.46, 5.22, 2.16, 0.38, 5.16:' 4:K019
6150  DATA  5.21, 1.38, 17.13, 65.41, 4.44, 1.76, 0.24, 4.45:' 5:N084
6160  DATA  3.29, 1.42, 12.17, 77.23, 1.81, 2.50, 0.12, 1.45:' 6:N553
6170  DATA  2.17, 0.91, 10.54, 79.86, 2.63, 1.92, 0.15, 1.80:' 7:K078
6180  DATA  3.51, 1.29, 10.78, 78.36, 2.50, 1.51, 0.10, 1.96:' 8:N262
6190  DATA  2.13, 0.84, 10.86, 80.54, 2.42, 1.29, 0.09, 1.84:' 9:N001
6200  DATA  3.20, 2.93, 12.97, 65.76, 2.20, 5.57, 0.77, 6.76:'10:K025
6210  DATA  3.75, 1.79, 12.72, 72.68, 1.76, 3.53, 0.25, 3.44:'11:K027
6220  DATA  2.83, 1.25, 10.95, 76.17, 2.11, 2.14, 0.32, 4.24:'12:K004
6230  DATA  2.65, 0.87, 10.78, 76.08, 2.23, 2.90, 0.41, 4.07:' ?:1004
```

表4

SAMPLE NAME THROWN IN THE STANDARD GROUP: 1004
DEFINITION OF DISSIMILARITY:
STANDARDIZED SQUARED EUCLIDIAN DISTANCE

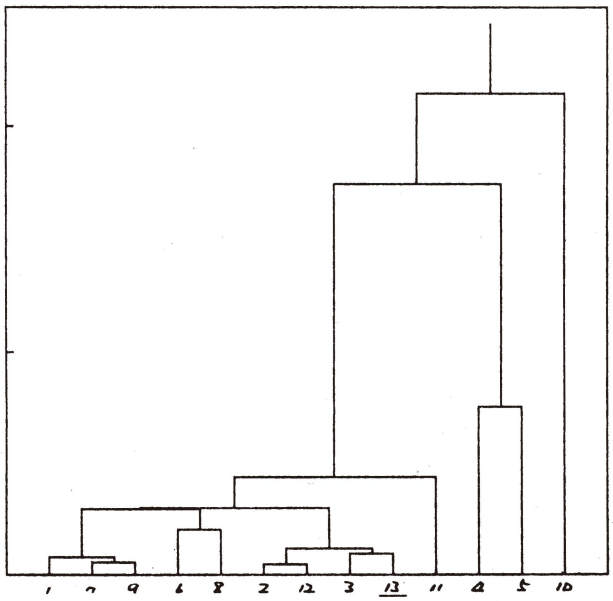
Summary : process of merging of clusters

1	:	O(2) - O(12)	0.4715	7	:	O(1) - O(6)	2.8863
2	:	O(7) - O(9)	0.5323	8	:	O(1) - O(2)	2.9862
3	:	O(1) - O(7)	0.7615	9	:	O(1) - O(11)	4.3707
4	:	O(3) - O(13)	0.9264	10	:	O(4) - O(5)	7.5331
5	:	O(2) - O(3)	1.1170	11	:	O(1) - O(4)	17.4112
6	:	O(6) - O(8)	1.9592	12	:	O(1) - O(10)	21.4813

Do you want to draw the dendrogram (y or n) ?

図1

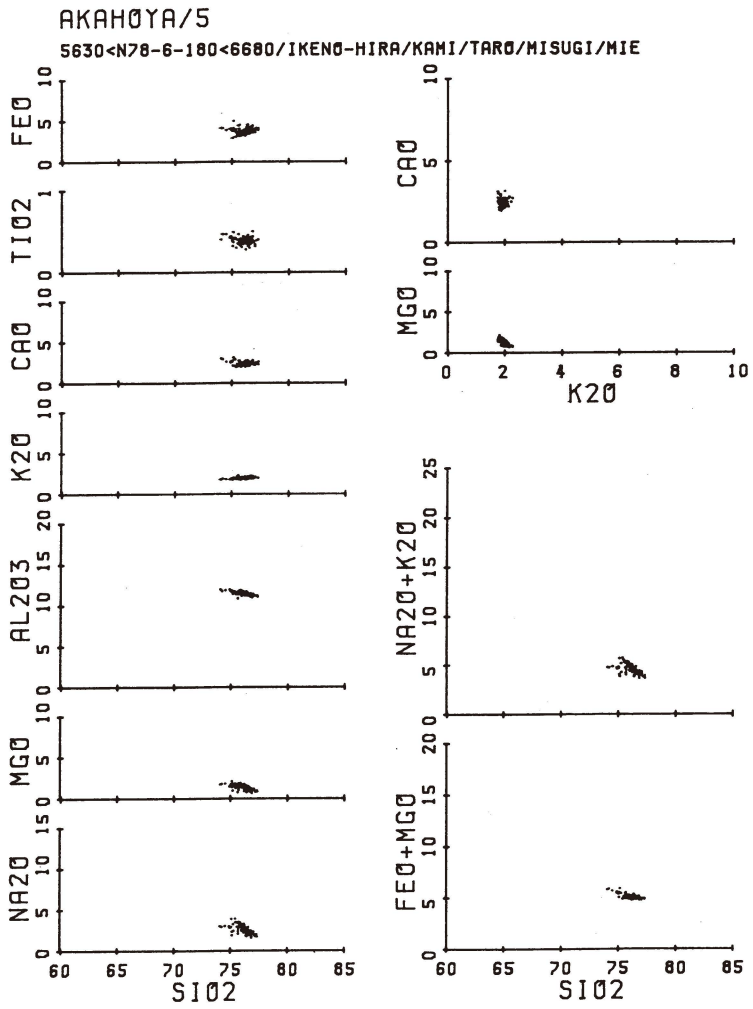
Dendrogram　(nearest neighbor method)



Object number (Left to Right)
O(1) O(7) O(9) O(6) O(8
O(2) O(12) O(3) O(13) O(11
O(4) O(5) O(10)

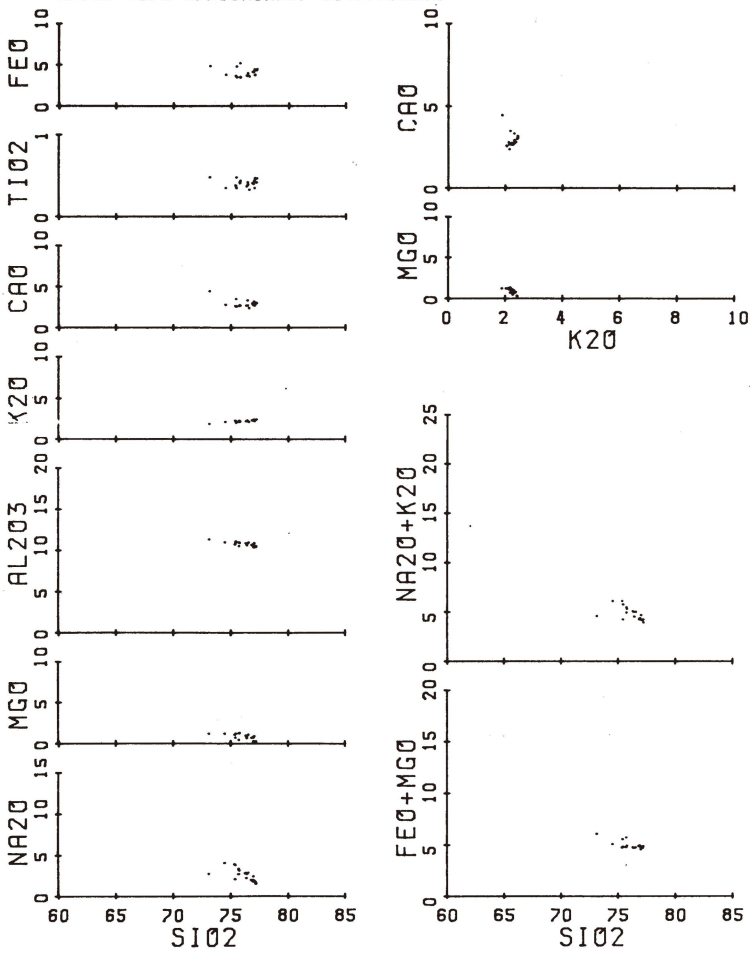
表5

	NA2O	MGO	AL2O3	SIO2	K2O	CAO	TIO2	FEO	ID-val
1004	2.65	0.87	10.78	76.08	2.23	2.90	0.41	4.07	
****/0498	2.38	0.92	10.73	76.19	2.22	2.91	0.42	4.23	0.237
AKAHOYA/0660	2.15	0.90	10.72	76.83	2.19	2.77	0.42	4.02	0.338
AKAHOYA/0826	2.32	0.92	10.81	76.74	2.17	2.70	0.40	3.95	0.343
****/0398	2.46	1.04	10.73	76.34	2.25	2.79	0.41	3.97	0.347
AKAHOYA/0431	2.61	1.01	10.81	76.22	2.25	2.60	0.39	4.12	0.354
AKAHOYA/0657	1.96	0.95	10.68	76.80	2.22	2.90	0.42	4.08	0.402
AKAHOYA/0833	2.68	1.07	10.89	76.36	2.15	2.64	0.40	3.80	0.471
AKAHOYA/0673	1.95	0.94	10.68	77.05	2.18	2.76	0.42	4.02	0.474
NISHIKZ-GL/216	2.42	1.03	11.00	76.38	2.16	2.59	0.42	4.00	0.475
AKAHOYA/0451	2.07	0.79	10.50	76.74	2.31	2.97	0.44	4.19	0.508



AKAHØYA/1004

LAYER VI/G-2/KISHIKAWA SITE/KASARI



第４章　発掘調査

第１節　概　要

遺跡は，南側から延びた舌状台地（マージ層）の上に形成された砂丘上にあり，遺跡西側（後方）は山手になり砂丘がゆるやかに傾斜していた。現在は段丘状に区画整地されている。以前はその後方にキシゴウ（喜子川）が流れていた。現在の喜子川も用水路としてその流れを変えているが，後方の西側を南から北にかけて流れ，遺跡の台地の先端部（北側）から東に曲って海へと流れており，遺跡西側と北側はこの喜子川で分断された地形であった。

遺跡の立地条件にあわせて南北に延びた形のグリッドを設定した。後に測量してみると，南北基準線は磁北とほぼ一致していた。グリッドは４ｍ×４ｍを基本に杭を設定した。北から南にＡＢＣ…，西から東へ１２３とグリッド位置を決めＣ－２グリッド（４ｍ×４ｍ）を中心に遺跡の確認調査を行った（グリッド配置図，第　図）。

Ｃ－２グリッドは表面採集で遺物が検出された場所附近であることから４ｍ×４ｍと大きなグリッドにした。他は遺跡の範囲確認のため東側へＣ－４グリッド，南側へＥ－２，Ｇ－２，Ｉ－２グリッドをそれぞれ２ｍ×２ｍの範囲だけ掘った。

Ｃ－２グリッドからは予想どおり爪形文土器が大量に出土したが，(1)遺物が小片である，(2)ローリングを受けた土器片が多い，(3)爪形文土器に伴う遺構の検出が出来なかった，(4)それに伴う共伴遺物が検出されなかった点などの問題がある。ただし土器は，小片ではあっても数量が多いこと，爪形文土器の単純層であることが確認出来たこと，またその下層にアカホヤ火山灰層を確認出来たことは，初期の目的を充分に達成し，大きな成果を上げることが出来たといえよう。爪形文土器の出土状況はＣ－２グリット北西部分に集中しており，他のグリッドからは少なかった。爪形文土器の遺物包含層は台地の北西部分になお残っており，更に北側と西側のどこまで広がっているかを確認することが今後の課題である。

なお，今回の調査で，Ｇ－２グリッドのアカホヤ火山灰層のⅥ層よりも更に下のⅦ層から，石器様の石片２点を検出した。爪形文土器やアカホヤ火山灰層の下層から石器様の石片が出土したことは今後の奄美先史時代研究に大きな研究課題を与えたことになろう。今後はマージ層も調査を行い，ＡＴ層の確認も心要になる。

ちょうど喜子川遺跡でこれらの石片が発見される１日前のことである。鹿児島県文化課職員が道路工事に伴う調査でイヤンヤ洞穴近くの台地を発掘していた。約６ケ月間に及ぶ長期の発掘調査であった。遺跡発見時は無文の土器片が数点出土しただけであった。[注1] ただし遺物包含層はマージ層の中で褐色になっていた。その遺跡でマージ層の下層から石器２点発見したとして，我々の喜子川遺跡に知らせて来た。喜子川遺跡にはちょうど河口，高宮，白木原各先生が現場指導にいらしたからである。そしてその翌日，喜子川道路でも，マージ層から石器様石片２点の検出ということになったのである。

N
千寺岩
県道佐仁万屋赤木名線
笠利町土盛僻地保健福祉館
土盛
12.0
12.6
20
18
18.6
19.0
20.9
25.8
20.4
23.4
10

第2図　遺跡地形図

第2節　B－4グリッドの調査

B－4グリッドは2m×2mで遺跡の範囲を確認するためにC－2グリッドの東側に設定したグリッドである。表層からすぐ第Ⅳ層に入っており，遺物包含層は確認出来なかった。砂丘上を削平した時にすでに3層は削られたものと思われる。第Ⅳ層上面までで出土遺物がなかったので，それ以上掘ることを中止した。以上により，第Ⅲ層の遺物包含層は現地の東半分には残存していないことが確認された。

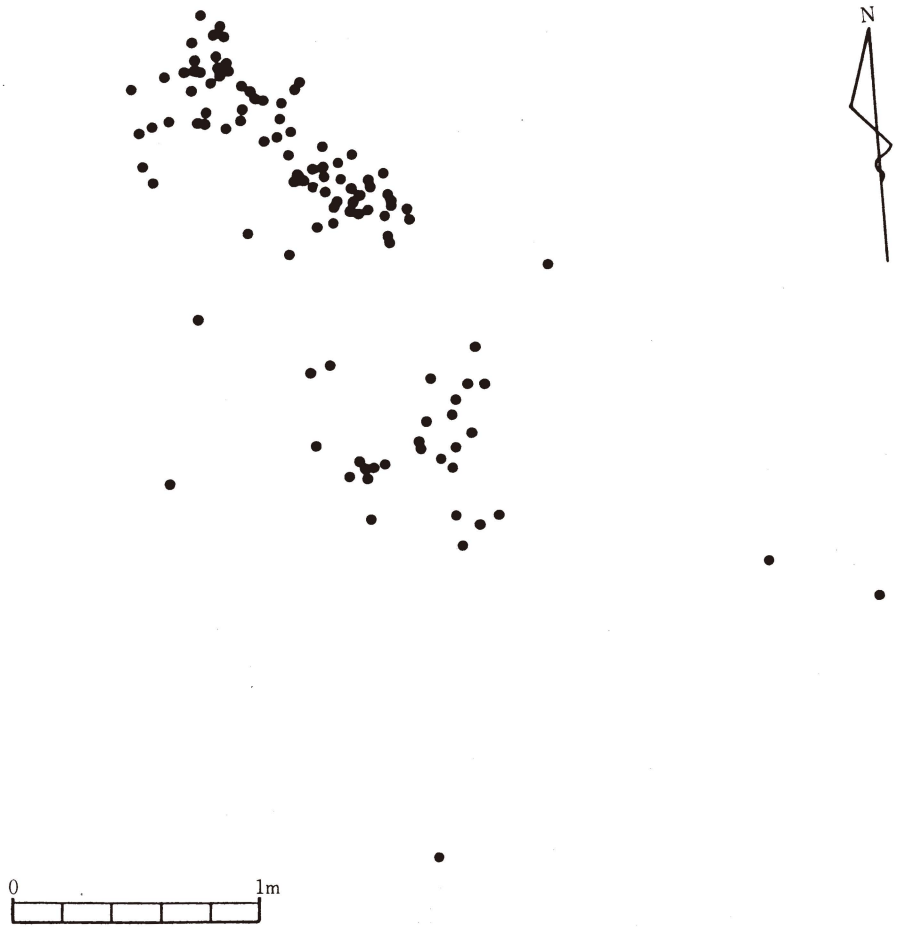
第3図　グリッド配置図

第３節　Ｃ－２グリッドの調査

本遺跡の調査のメーングリットとして設定した。基本層序もこのグリッドを中心にして行い，Ｅ－２，Ｇ－２，Ｉ－２の各グリッドとの比較を行った。

第Ⅰ，Ⅱ層は表土層で砂丘を削平してできたもの。第Ⅲ層からが遺物包含層になっている。Ⅰ，Ⅱ層からは白磁，爪形文土器，石器などが出土しているが，Ⅱ層までブルドーザーによる整地の爪痕が残っている。

第Ⅲ層は遺物包含層で爪形文土器のみを出土した。遺物の取り上げは，層を10cmレベルで区切っておこない，前後３回の取り上げを行った。いずれも同じような広がり方をしていたのが注目される。０～10cmレベルでは 110個の土器片が検出されいずれも第４図のように北西に集中して出土している。土器は小片で大半が寝た状態で出土しているが，多少立った状態で出土しているのもあった。



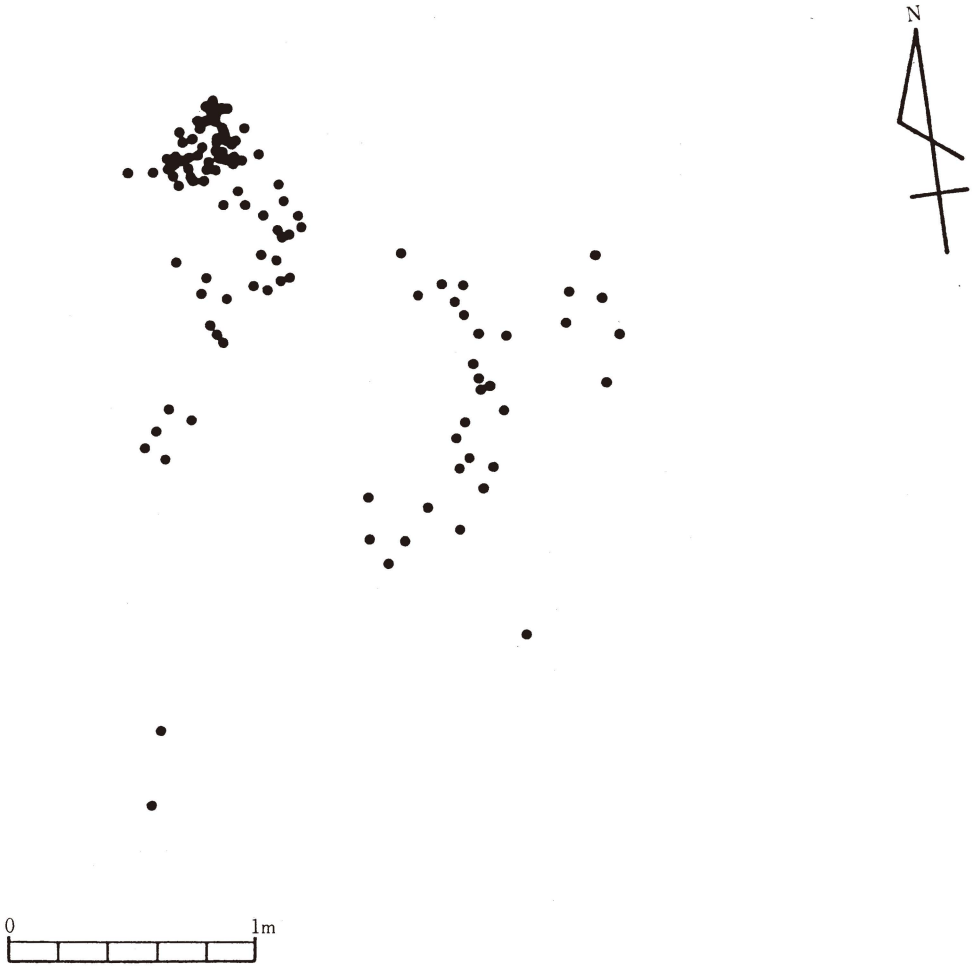
第４図　Ｃ－２グリッド土器分布図

出土遺物No.１～No.110（０～10cm）

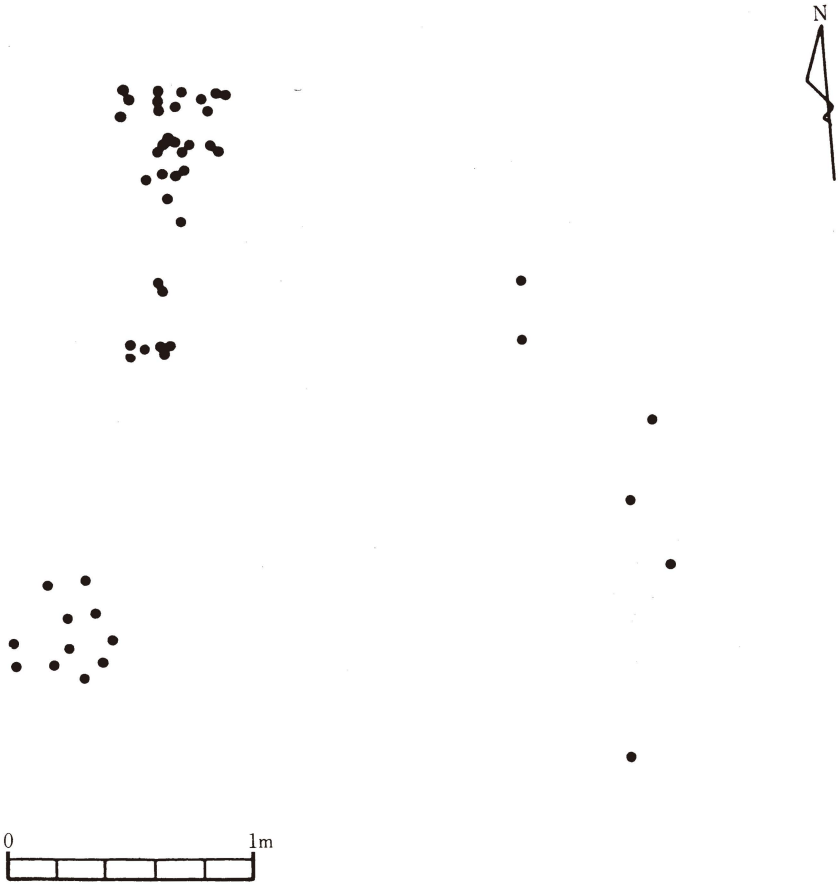
第Ⅲ層の10～20cmのレベルの土器の出土状況である(第５図)。遺物は111～231を数える。すべて爪形文土器である。第４図と同様に北西の隅に集中している。土器片の大きさはやや大きい。０～10cmのレベルにくらべローリングを受けている遺物も多い。さほど傾斜しているようには思えないが，遺構プランは確認出来ない。褐色砂層で砂粒子が細かい。出土した遺物はほとんど接合不可能のものが多い。

第Ⅲ層20～30cm(第６図)，前の０～10，10～20cmのレベルにくらべ出土遺物は少ない。No.232～284点を数える遺物が集中して出土した。土器は０～20cmのレベルが一番多く出土しており，30cmレベルが最も少ない，出土遺物の分布状況はグリッドの北側に多く集まっている(第６図)。

全体的にみると第Ⅲ層そのものが北西へ傾斜しており，遺物はその部分に集中して流れ込んだような状態であった。遺構は，あるいはもっと南側にあったかとも思われるが，南側はすでに削平されており，遺物包含は残っていない。

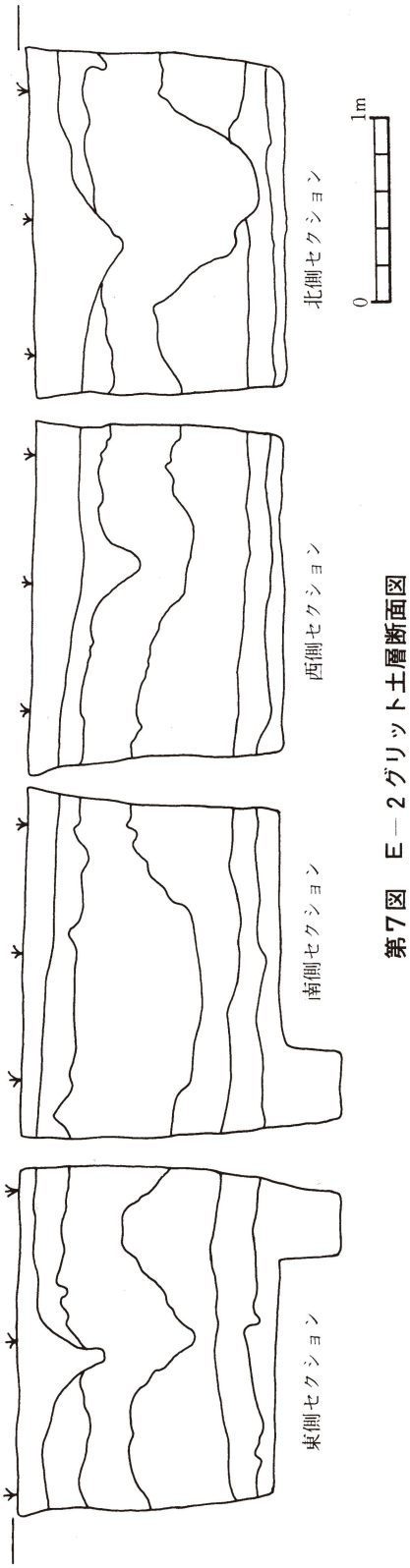


第５図　Ｃ－２グリッド（10～20cm）
土器分布図　出土遺物No.111～231



第6図　C－2グリッド20～30cm
土器分布図　No.232～284

以上にのべたように，第Ⅲ層の遺物が全体的に北西に集中して出土していたことから，包含層は更に西側へ広がっていたものと思われるが，遺跡西側はすでに整地され約 2.3m 位下げられて畑地になっている。すでに砂丘部分は残っていない。しかし畑地の西側，喜子川の近くになるとまだ砂丘が残っているので遺跡の一番西側に確認のトレンチを入れる必要があるであろう。遺物がわずか4m×4mのグリッド内ですでに北西に集中しており，東側や南側からはほとんど出土していないという状況から見ても，このグループは比較的小規模なまとまりのように思われる。出土遺物の大半がローリングを受けていること，接合資料が少ないこと，遺構が検出出来なかった点などを総合すると，遺跡そのものはもともと小規模のものでしかなかったのか，あるいは，より西側にあるのかのどちらかであろう。



第7図　E－2グリット土層断面図

第4節　E－2グリッドの調査

E－2グリッドは2m×2mのグリッドでマージ層まで掘った。第3層が爪形文の遺物包含層であるが，わずか数点の出土しかなかった。

土器片はC－2グリッドで出土した状態と一緒である。小片でややローリングを受けている。

第Ⅲ層は部分的に落ち込みがあり起伏が多い。層全体としてかなり荒れた感がする。

第Ⅶ層からは焼石などを含む礫が75点余検出された。その大半は焼石である。こぶし大程の大きさを最大とし他は小礫である。2m×2mのグリットのため石の配列は不明であったが，全体的に観察すると特別に人為的な配列はないように思える。またこれだけ多くの石が出土しているが，石器はほとんどない。焼けた石が多いことから何らかの遺構に関連する物と考えられるが調査範囲が狭まくⅦ層の全体的な広がりは不明である。またこの層からはまったく土器の検出はない。砂まじりの赤土で粘性も強い。土器を持つ文化の前の時代ではなかろうかと考える。赤土層の中から焼石が多数出土しており，人為的と思われることからこの層全部をふるいにかけた。ふるいにかけた結果は小粒の礫と2点の石片を検出した。石材等についてはまだ専門家の鑑定を経ていないため後日報告したい。

Ⅶ層は土器を伴わない石器時代の可能性が大きい。但しまだ沖縄，奄美を含む南島からもこのような例が少ないため，もう少し時間をかけて検討する必要がある。

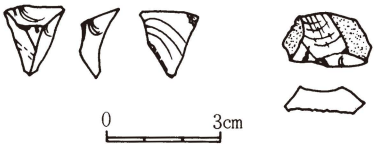
第Ⅶ層はマージ層になっている。第Ⅵ層はマージ層を確認するだけで，掘り下げた部分も約30cm程でわずかである。第7図がE－2グリットの東西南北のセクション図である。第　図は第Ⅶ層の礫の出土状況である。

第５節　第Ⅶ層出土の石器

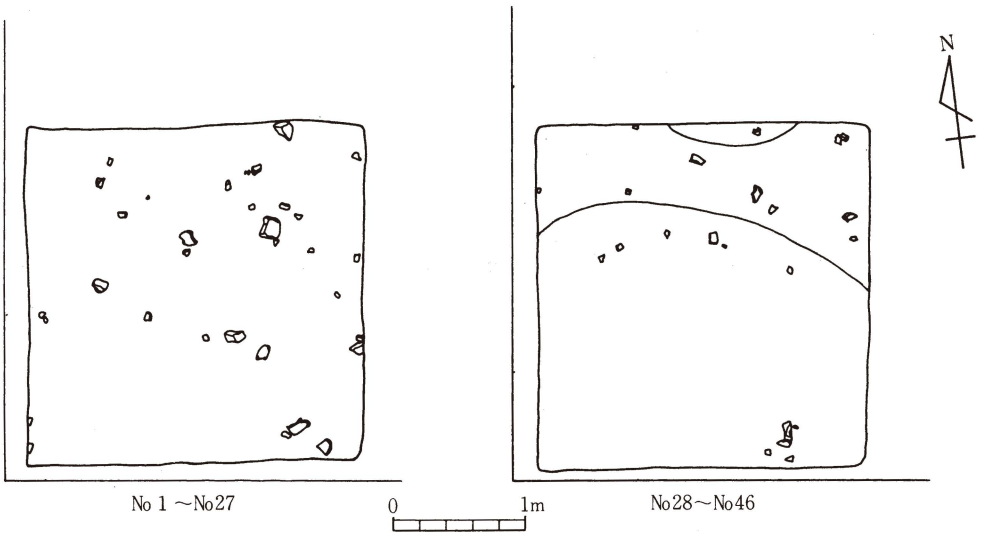
第Ⅴ層からの石片の出土は２点である。第　図１は二等辺三角形状で三角頂点部分が欠けている。頭辺が 1.5cm，長辺が２cmである。石材は不明だが全体的に黒く一部分が白ぽい。

第　図２は一部分が剝離されており，他は自然面である。石材は不明だが１に比べて白ぽい。片面だけ一ケ所を剝離してある。

この２点は第Ⅶ層の土をふるいにかけて検出されたものであり，出土状況は不明である。第Ⅶ層の発掘面積はわずかであったが，今後注目される層である。これが石器であれば，爪型文土器よりも古く，さらにアカホヤ火山灰層よりも下層からの発見であるから，6300年よりも古い年代になる。



第８図　第Ⅴ層出土の石片



第９図　Ｅ－２グリット　第Ⅴ層　礫出土状況

第6節　土　　器

本遺跡では第Ⅱ層，第Ⅲ層から土器が出土した。第Ⅱ層までは攪乱層のため面縄前庭式土器，沈線文土器，爪形文土器などが混在している。本遺跡の文化層は第Ⅲ層と第Ⅴ層である。第Ⅲ層からは土器片のみ出土した。そのほとんどが小片である。図面番号では全部で 284番まで数えているが，土器片総数は約 1,500点に達する。口縁部片は56点を数える。他は主として胴部片であり，底部は丸底と思われ，はっきりと底部とわかる資料はない。

第Ⅲ層出土の土器はすべて爪形文土器である。爪形文土器はこれまで数タイプに分類されている。[注1] 沖縄県野国貝塚ではⅥ類に分類されている。しかし大別して東原式，ヤブチ式の二つに分けられる。本遺跡でも基本的に三タイプに分けられるが，文様などから見ると，1類と2類は近いけれど，3類土器はあきらかに違う。

1　類 土　器…指頭押圧痕と爪痕を有する土器，指頭を器面に押しあててやや指先を立てて引いたと思われる土器。爪痕を意識してつけている。

2　類 土 器…文様は1類と類似するが指頭をややななめにして引く，爪痕を意識せず指頭圧痕のみを意識している。沖縄のヤブチ式土器と類似する。

3　類 土 器…刺突文土器，半截竹管状のもので弛文している。

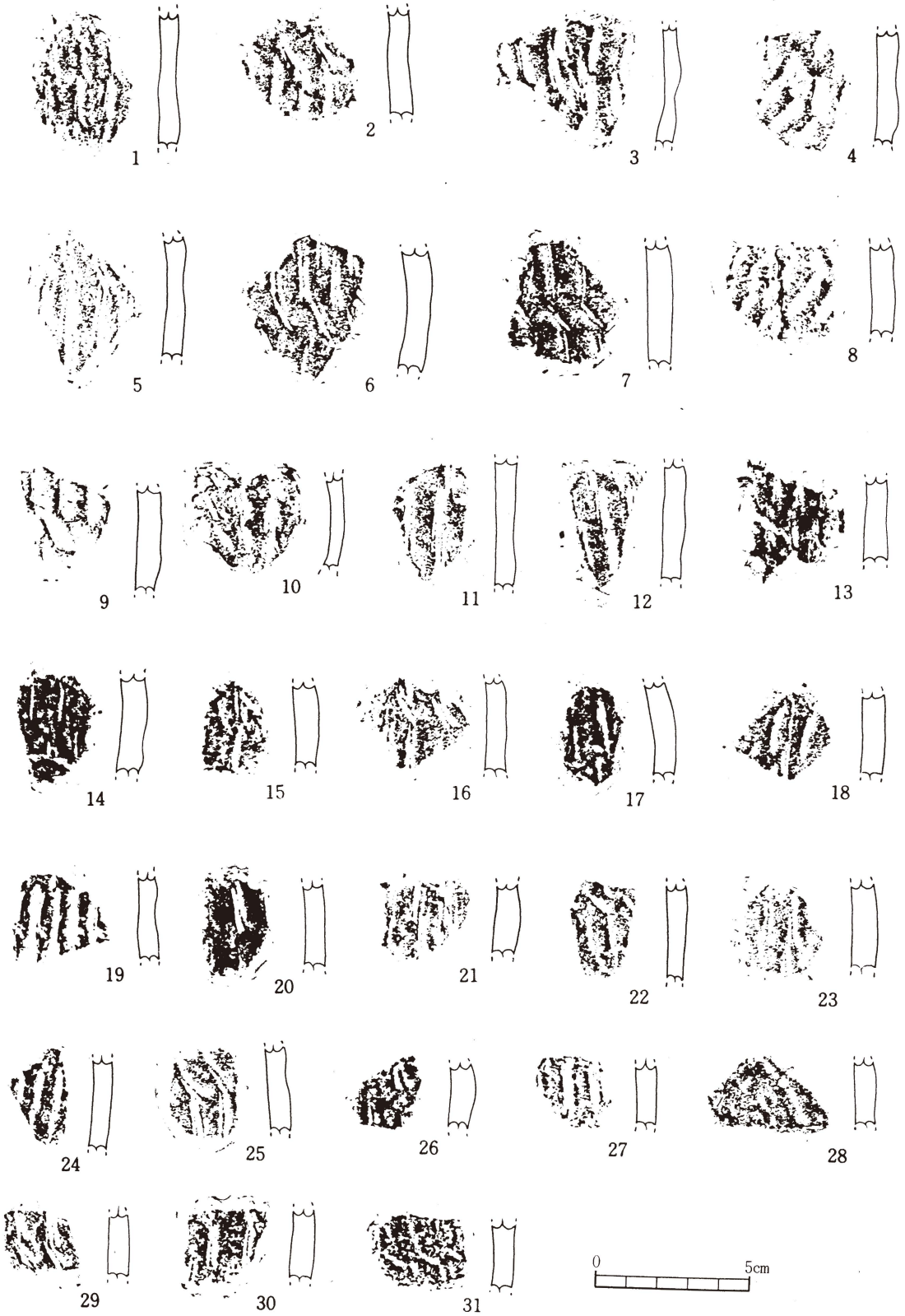
その他の土器…その他の土器としたものには沈縄文土器と面縄前庭式土器片2点も含まれる。全部で17点である。

以上4分類のうち，爪形文土器は3類を占める。しかし，これらの土器は沖縄の東原，ヤブチ式土器と直接比較することは出来ないように思える。3類土器以外の1，2類土器は指頭圧痕を押し引いた文様で，押圧痕がヤブチ式土器のそれのように整然としているものが少ない。あえて比較出来る資料としたら野国貝塚の第3群土器Ⅲ類b土器で指頭痕が長楕円状になる土器と類似する。[注1]

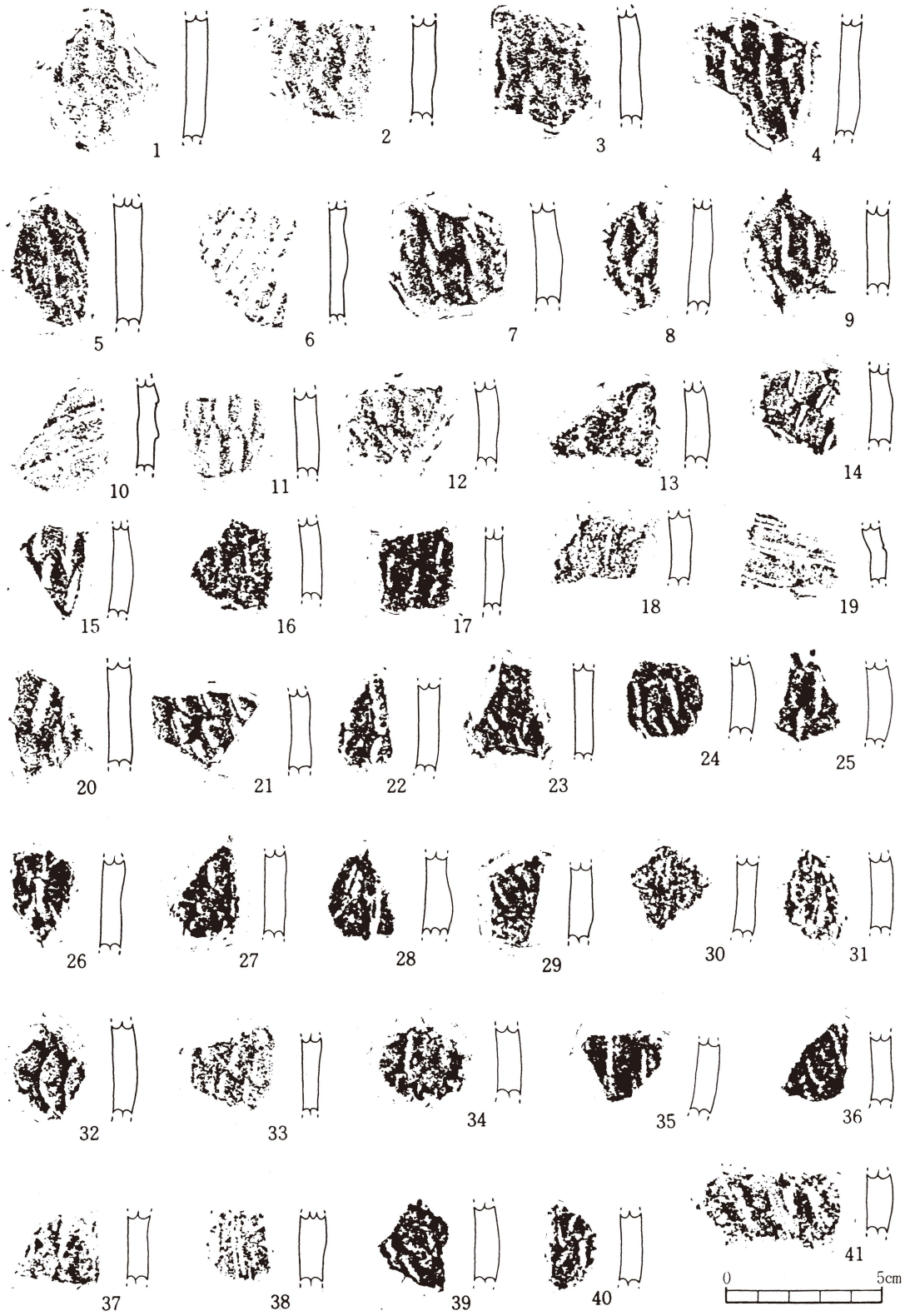
1．1類土器

1類土器としたものは，指頭圧痕と爪痕を意識してつけたもので，文様単位が全体として長楕円状になっている土器である。第10図1～3は指頭押圧文と爪形文があるものである。色調は明褐色である。胎土は石英粒を多く含みザラッとした感じである。第10図はすべて1類土器である。1類土器は押圧の強いものと押し引き文タイプの二つに分けられそうであるが器形を復元出来る資料がなく，また土器片も小片のため全体の文様構成が不明であるので分離が困難であり，指頭圧痕と爪形という共通の特徴があるので1類とした。第10図は指頭圧痕と爪形の強い土器で押し引きが少ない資料である。第10図7，8，11，16，18，21，22，23，27，32，33などは軽く指頭で押したような文様である。第10図4，5，9，14，17，19，35，36，39，40は比較的爪形文を意識してつけいる。文様は全体的に爪形が上から下へ弛文されている。1，2のように下段の爪形文が左上から右下へ斜向し，爪形で「く字」状になるのもある。これが全体的に入いるのかは不明である。

第11図は第1類のうちやや指頭で押し引いてつけた爪形文を有する土器である。文様

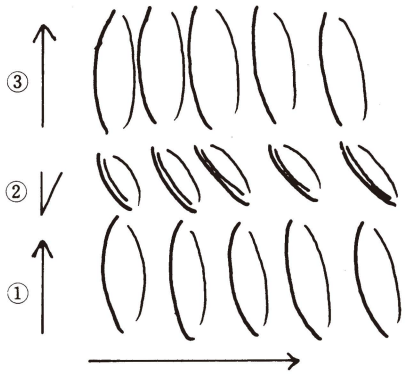

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
0
5cm

第10図　1　類　土　器（A）


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
0
5cm

第11図　1　類　土　器（B）

は第10図と同様指頭圧痕と爪形文で構成される。文様ははっきりしている。また第11図2，4，5～9，16，21，22，25，29のようにタテに押引きして，そのつなぎに左上から右下への短い爪形文を有し，下にまたタテの押引きを刻している。この文様構成はかなり規則的なものである。ただし，このまま全体に及ぶかどうかは完形土器がないため不明である。5，6は下方の爪形文が入ってから斜めの爪形を左から右へとめぐらし，そして上の爪形へと施文の順序が観察出来る。このことから，爪形の施文方法は下から上へと行われたと思われる（第12図）。7も同様である。色調は明褐色，石英粒子を含み，ザラザラした感じである。焼成はやや良い。薄手土器である。第11図の土器は全体として6㎜～7㎜の厚さである。



第12図　爪形文様構成順序

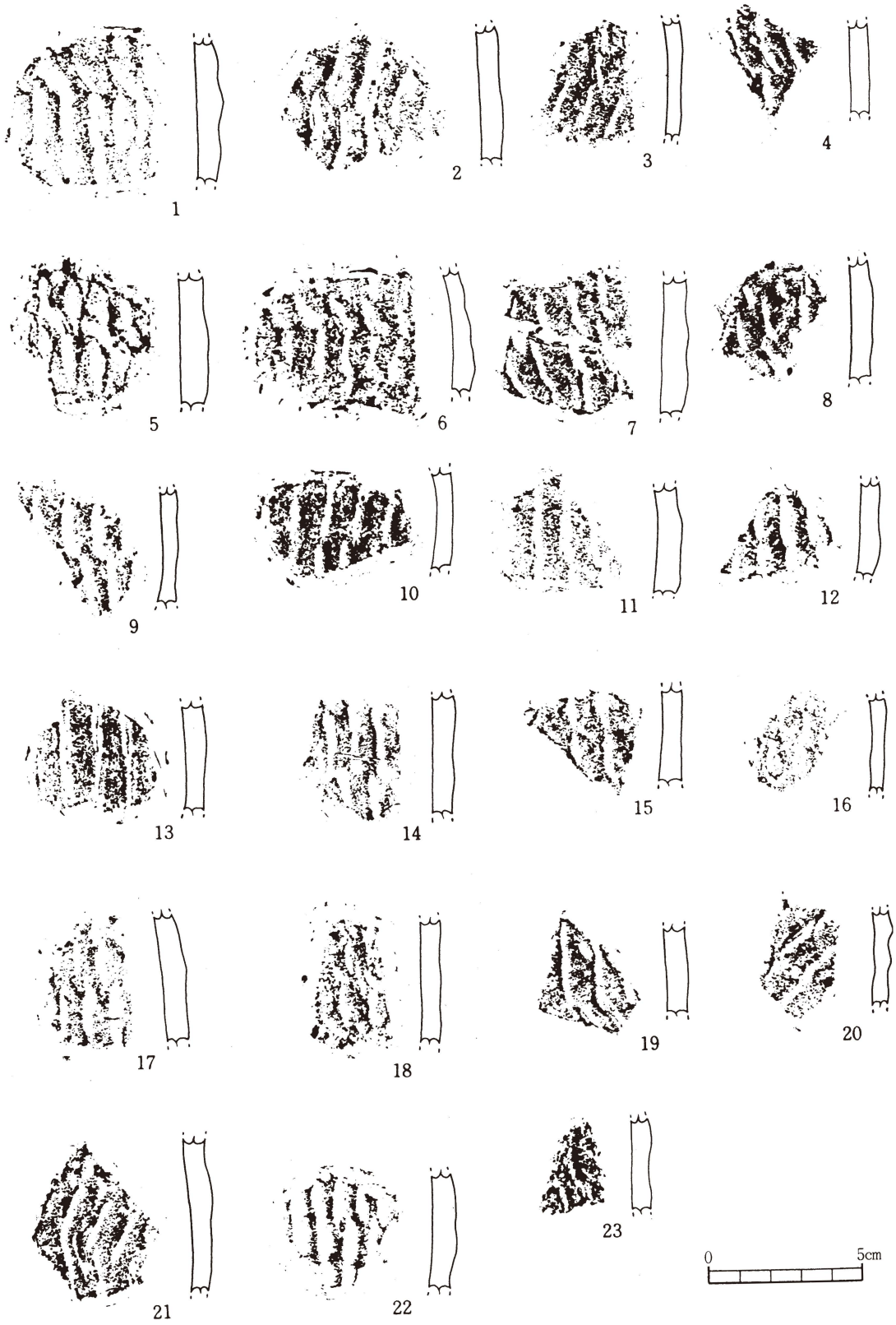
2類土器（第13図）

文様構成は1類土器よりも整然としている。第13図1と6は第12図と文様構成は一緒である。色調は表が暗褐色，裏が明褐色，焼成はやや良い。胎土は石英粒子が多く約2㎜程の粒子も含む，出土遺物の中では比較的大きな土器片である。文様は下から長さ約1.5㎝の押引き文を二段有し，その上を斜行指頭圧痕文がめぐる。2は色調が赤褐色で石英粒を多く含む。焼成はやや良し。文様構成は下で斜行指頭圧痕文をめぐらし，その上に指頭圧痕の押引き文を存する。斜行爪形文の上下に指頭圧痕の押引き文の構成であることがわかる。19も同じである。

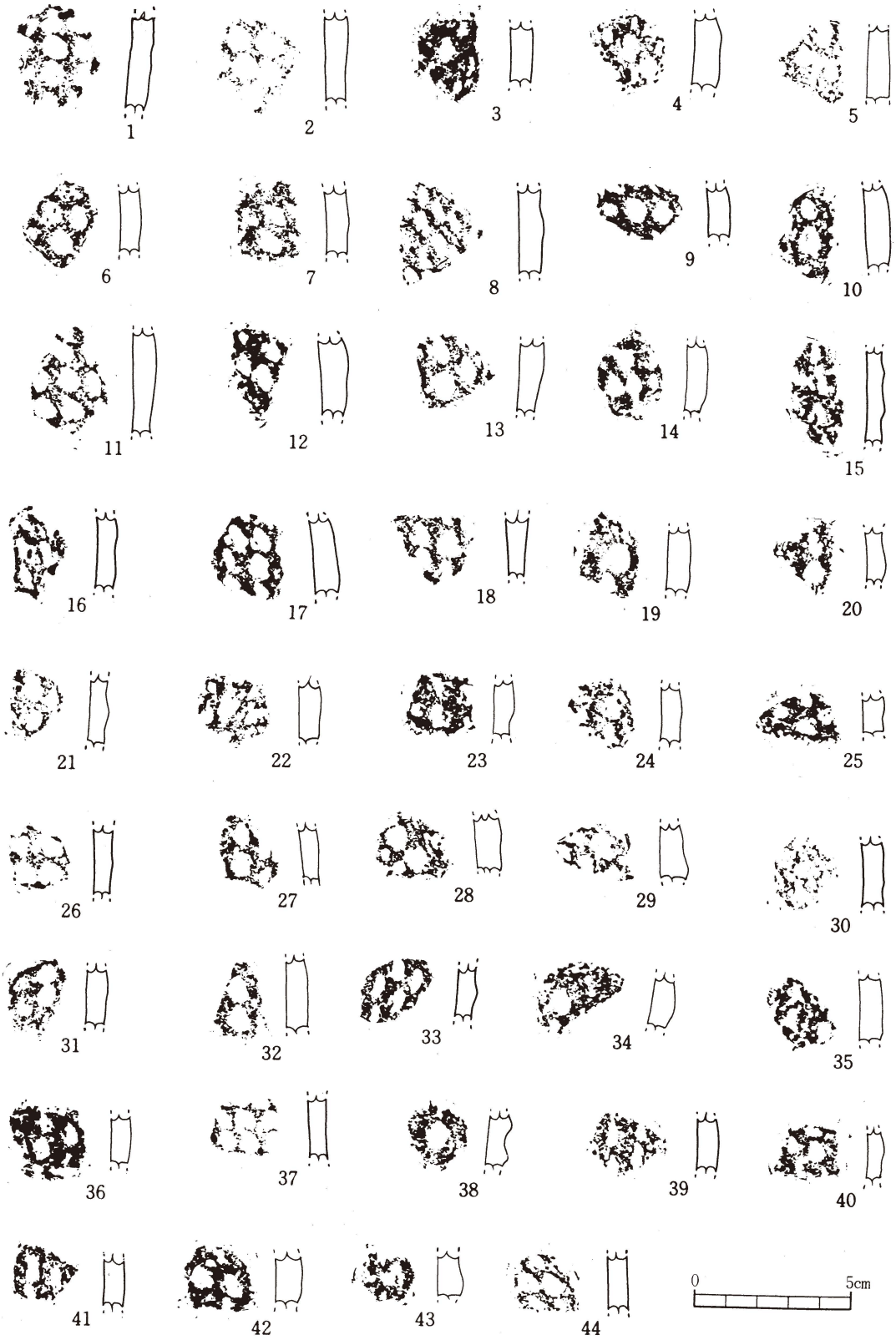
施文は指だけで行っており，指頭で押さえられた部分は，まず器面調整が行われ，その後に指頭圧痕文がつけられたと思われる。裏面にも指頭痕状のくぼみがあるが明瞭ではない。2類土器は比較的大きな土器片のため文様構成の観察が出来る。指頭圧痕の押し引きによる文様構成は，粘土を積み上げる際の器面調整を行ったときに出来た文様でなく，一度器面調整が行われてから文様が刻されたと思われる。爪形文の文様構成に切れ間がないこと，また粘土のつなぎ目と思われる個所も器面調整が行われ，その上に爪形文が刻されていることなどが以上の想定の根拠である。2類土器も1類土器と同様に，器形は不明である。胎土は全体的に1類と同様，石灰質の砂粒や石英を多く含み，ザラザラした感を与える。器厚は全体的に6㎜～7㎜である。沖縄の野国貝塚出土の爪形文土器よりやや厚手である。

3類土器（第14図）

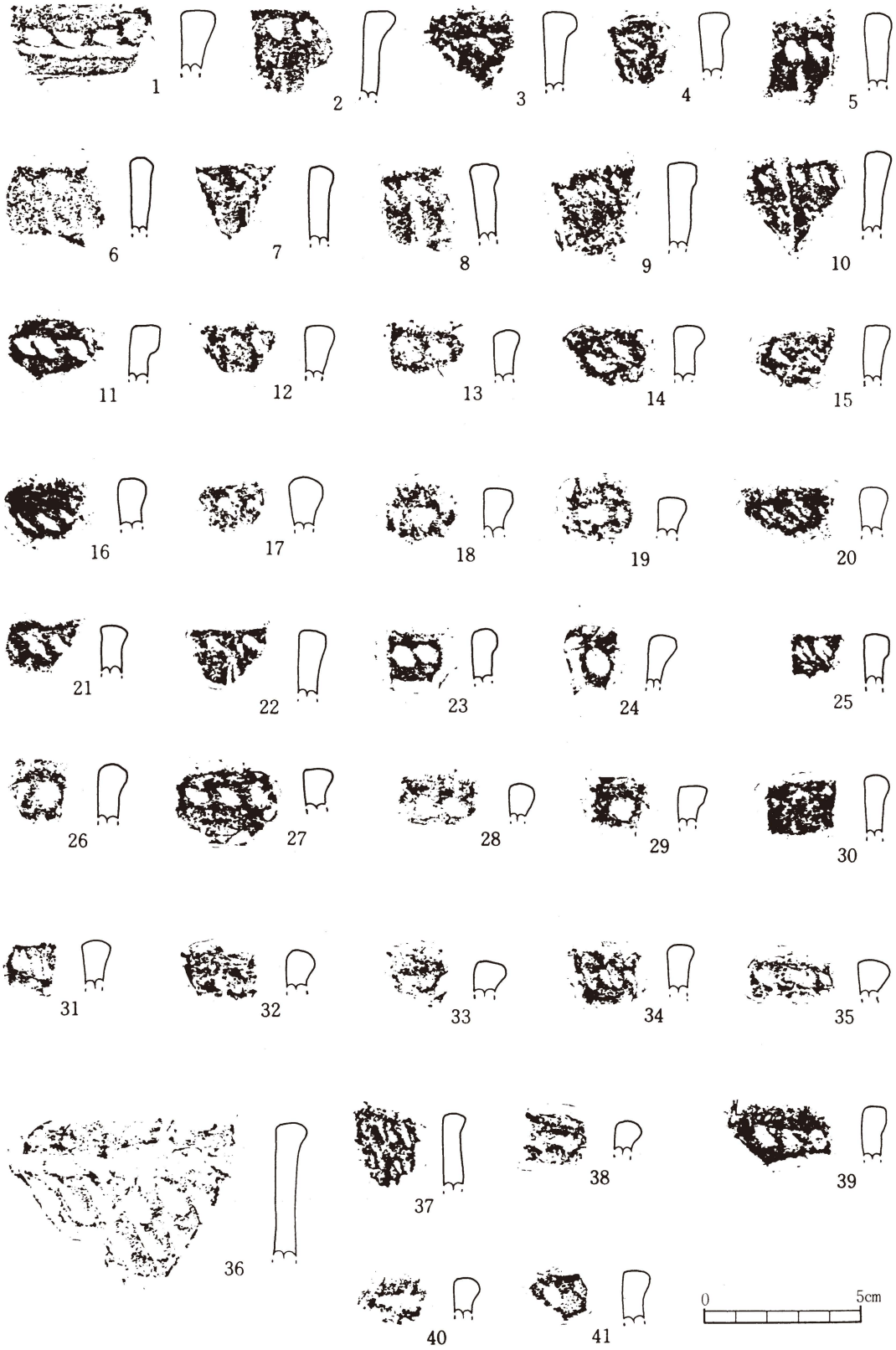
3類土器は半載竹管により施文された土器である。1，2類が指による施文方法であるが，3類土器は半載竹管の背中を押し引いて施文している。土器片がほとんど小片で文様構成は不明であるが，器面全体に施されていると思われる。施文方法は全体として左から右に引いている。胎土は1，2類土器と同様に砂粒子を多く含みザラザラしている。器厚も1，2類とほとんど同じである。



第13図　2　類　土　器


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
0
5cm

第14図　3　類　土　器


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
0
5cm

第15図　口　縁　部

口縁部（第15図）

口縁部は第15図36を除き１，２，３類に分類出来なかったため口縁部として一括してまとめた。口縁部は全部で54点を数える。全体的に，口唇部が丸味をもって肥厚し，肥厚部分がやや外反している。文様は口唇部直下に，１条の爪形文を右下りの斜位方向でめぐらしているのがほとんどである。施文具は爪形とヘラ状の２タイプがある。施文方向は右から左へである。

爪形で施文されたと思われるものは３，７，８，16，21，36，37等である。ヘラ状の施文具を使ったと見られるものに１，２－５，６，11，23，24，25，26，27，28，29，31，35，39などがあり，他ははっきりしないが爪形ではなく施文具によるものと思われる。

口唇部直下に１条の爪形文をめぐらし，その下には斜向の爪形文をめぐらしている。36は口縁から爪形文土器が接合された唯一の土器片である。色調は明褐色，口唇部が丸味をおび外につまみ出たように外反している。口唇直下から爪形文を一条めぐらし，その直下からすぐ指頭押圧文と爪形文を施した１類土器である。６も口縁部から胴部にかけて爪形文が斜向して入っている。

７，８は口縁部から口唇部に対して垂直方向に配されている。他は不明である。１は口唇直下のにヘラ状の施文具によって刺突文が１条めぐらたれており，さらにその直下に水平方向に左から右へ１条の沈線がめぐらされている。その下方にも沈線があるが不明。

口唇直下の施文方法は，

１．口唇直下を爪で施文している。

２．口唇直下にヘラ状の施文具を使用している。

の２種類があるが，さらにその下につづく文様として，

１．口唇部に対して垂直方向に爪形文が配されているもの。

２．口唇部に対して斜めに爪形文が（左上から右下り）配されているもの。

３．口唇部に対して水平に左から右方向に沈線が刻されているものの３種類がある。

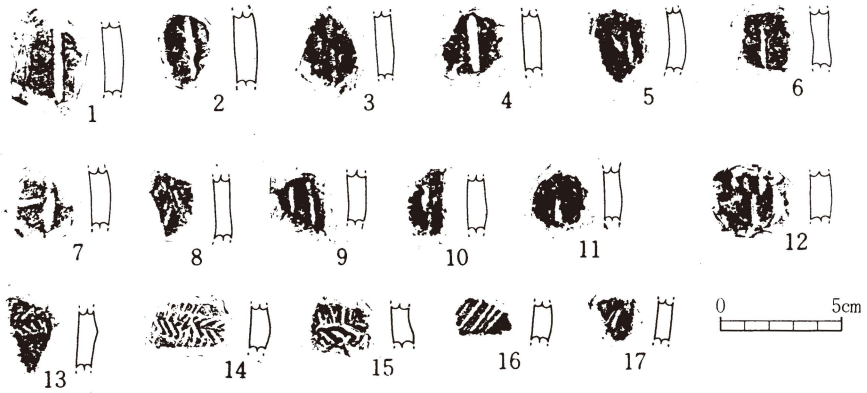
いずれにしろ土器片が小さすぎて全体の文様構成をつかむことは出来なかった。

第16図　その他の土器

その他の土器はすべて第２層から出土したもので面縄前庭式土器片（13～16）も含まれているが，１～４，７～１２のような継位置の沈線をもつものが多い。形式名は不明である。

爪形文土器は第１～３類まで分類したが全体として土器が小片で，全体の文様構成が不明であるため，完全な分類とは言えない。今後復元される資料の増加がまたれるところである。

口縁部については口唇直下に刻目をめぐらす施文具のちがいと斜向爪形文と垂直爪形文，そして口唇部に対して水平の沈線文などに分けられる。全体の文様や器形などについては不明であるが，今後沖縄から出土した野国貝塚の爪形文土器などともっと比較する必要があると思われる。



第16図　その他の土器

今回分類を行った結果では完全に東原タイプ，ヤブチ式タイプと思われるものは少なかった。また全体的に器厚が少し厚いのも特徴であろう。今後の資料の増加に期待したいと思う。

第5章　まとめ

南西諸島，あるいは南島と呼ばれる島々には，古くから独特の文化が存在していた。それが最も顕著にあらわれたのが琉球王朝時代である。この王朝時代の文化の独自性は，南島が占める地理的な位置と，その自然環境に負うところが大きいと考えられるが，同時に，なによりもそこに至るまでの歴史的経緯も重視されねばならない。

田村は，昭和49年以来，三上次男博士の御指導のもと，南島における中世遺跡の調査にたずさわって来た。その際，中世的世界のなかでの南島文化の独自性を追求するのは勿論であるが，その独自性が醸成された歴史的経過がいかなるものであったかという観点から，南島諸地域の考古学的調査全体にも関心を払って来たのである。

さて，沖縄諸島における先史時代研究は昭和40年代になってようやく本格化して来たといえるが，とくに昭和50・51年度に実施された読谷村渡具知東原遺跡の発掘調査は，沖縄貝塚時代の上限を一気に縄文時代前期ないしそれ以前にまで引き上げたという点で画期的なものとして注目された。とくに下層から発見された爪形文土器の存在は，南島先史文代の形成に，九州・本土の先史文化が大きく係わっていたことを予想させるものであったが，文化全般については，なお未知の部分が多かった。

ところが，ついで昭和55・56年度に実施された嘉手納町野国貝塚B地点の調査では，この爪形文土器が大量に発見され，爪形文土器を指標とする文化の内容が一段と明確にされると同時に，新らたな問題も提起したのである。すなわち，この調査による発掘面積は僅かに 180㎡程度であるが，それにもかかわらず，5,000点以上の爪形文土器片が出土したこと，これに伴うものとして，数百頭にものぼるイノシシの骨が発見されたこと，全体は打製であるが，刃部の

みを蛤刃状に磨いた石斧が多数出土したことなどの事実が報告された。この場所が生活の際の不用物を投棄した，いわゆる「ゴミ捨て場」であったからであるとはいえ，これほどの遺物の集中度は，他の縄文時代草創期の遺跡には例のすくないことであろう。また九州における爪形文土器に伴出する石器は，細石器または尖頭器系統のものであって，打製石斧ではない。以上の諸点から考えると，沖縄本島で発見される爪形文土器が九州や本土のそれのように，縄文時代草創期の土器であるとは直ちに言えないのではないかという疑問を持たざるを得ない。(注1) しかし一方，東原遺跡や野国B地点出土の爪形文土器が，九州や本土のそれと全く無縁のものであるとも云いにくい点もある。田村は，こうした矛盾をどのように解決するかという点が，南島先史考古学の緊要の課題の一つであることを認識していた。とくに，爪形文土器と打製石斧の結合がどの地域で行われたものであるのか，という点の解明がこの問題解決の鍵になるのではないかと考えていた。

田村は一昨年夏，徳之島で発見されたカムイヤキ窯跡の踏査に出掛けたが，その途中，笠利町歴史民俗資料館の中山氏に会い，氏の案内で喜子川遺跡を見学し，中山氏の説明を聞いた。中山氏によれば，ここにはアカホヤ火山灰とみられる火山灰層があり，その上位から爪形文土器が出土するという。もし中山氏の言が正しければ，すくなくとも喜子川遺跡の爪形文土器は，アカホヤ火山灰の降灰時期（約6300B，Pとされている）よりも新しいことになる。このことは，南島における爪形文土器研究に大きな進展を与えることになる。ただ，なにぶんにも，崖面から採集した断片的な資料によるものであり，伴出遺物も不明である。やはり正式な発掘資料に基づく，科学的な判断が必要であろうと考えたのである。

田村は帰京後，三上次男博士に相談し，調査費の援助を，高梨学術奨励基金にお願いすることとしたのである。幸いにして，財団側の援い理解を得ることができ，昨年8月の調査を実施することができたのである。

調査の進行状況とその結果については本文を参照していただくこととし，ここでは，田村の印象や考えを述べて〝まとめ〟としておきたい。

(1) 喜子川遺跡は砂丘上に存在している。しかし，この砂丘の多くの部分が，畑地綜合開発によって大きく改変され，本来の形態をとどめていないため，爪形文土器の包含層が，元来は，この砂丘上のどのような位置を占めていたのか，復元することが困難であった。爪形文土器の包含層は褐色の砂層で，この層の下には，白色の堅く凝固したクール層が厚く堆積し，アカホヤ火山灰層はさらにこの下に位置している。アカホヤ火山灰層と遺物包含層との間隔は　cmぐらいはある。

(2) 爪形文土器は前記したように，砂丘上の比較的上位に堆積した褐色砂層中に包含されているわけであるが，その状況をみると，決して一様に存在しているのではなく，かなりの粗密をみせている。とくに，C－2グリッドの東南隅と西北隅を結ぶ対角線を軸とした，一定の巾の範囲内に，帯状に，より多く集中する傾向が認められた。しかも現地での観察によると分布は水平ではなく，西北隅に近いほう（砂丘の低いほう）では，より深いレベルにまで存

在していたようにみえた。この状況は，本来の砂丘の傾斜に見合うものと考えられる。そのうえ，今回の調査で得た土器片の大部分が細片で，且つ摩耗度がいちぢるしいことを考え合わせると，これらの土器がより高いほうから低いほうへと転移し，低い部分に，たまり気味に堆積したのではないかと考えられるのである。

(3) 爪形文様そのものは，大きく三分類ないし四分類できるようである。指の先を押しつけて文様をつける際，爪の痕が器面に残るように指の先を押すものを第1類；これはさらに，爪痕の短いもの（1 a）と長いもの（1 b）の二種類に分けられる），爪痕がのこらないように指先を押しつけるもの（第2類），半載竹管の背中を利用しているもの（第3類）などがある。このうちの1 a類は，どちらかというと，野国貝塚第Ⅲ群Ⅱ類bに近く，1 bは同Ⅲ類bに近いものと思われるが，必ずしも同一ではない。第3類土器は東原遺跡の出土品のなかに，小数みとめられる。すなわち，文様の点からいうと，喜子川遺跡の爪形文土器と沖縄本島の爪形文土器とは共通するものと，異なるものがある。一方，口縁部をみると，口縁部が肥厚し，少し外反する点や口縁部直下に，短かい，右下りの爪形文を1条めぐらす点など，沖縄の爪形文，あるいは広く九州の爪形文土器と共通した面もみとめられる。

要するに，河口貞徳氏が指摘されるように，喜子川遺跡の爪形文土器には，他の遺跡の爪形文土器とはやや異なった要素がみられるのである。これが地域的なものなのか，時間的なものなのか，にはかに判断し難いが，筆者には，後者である場合が強いように思えるのである。

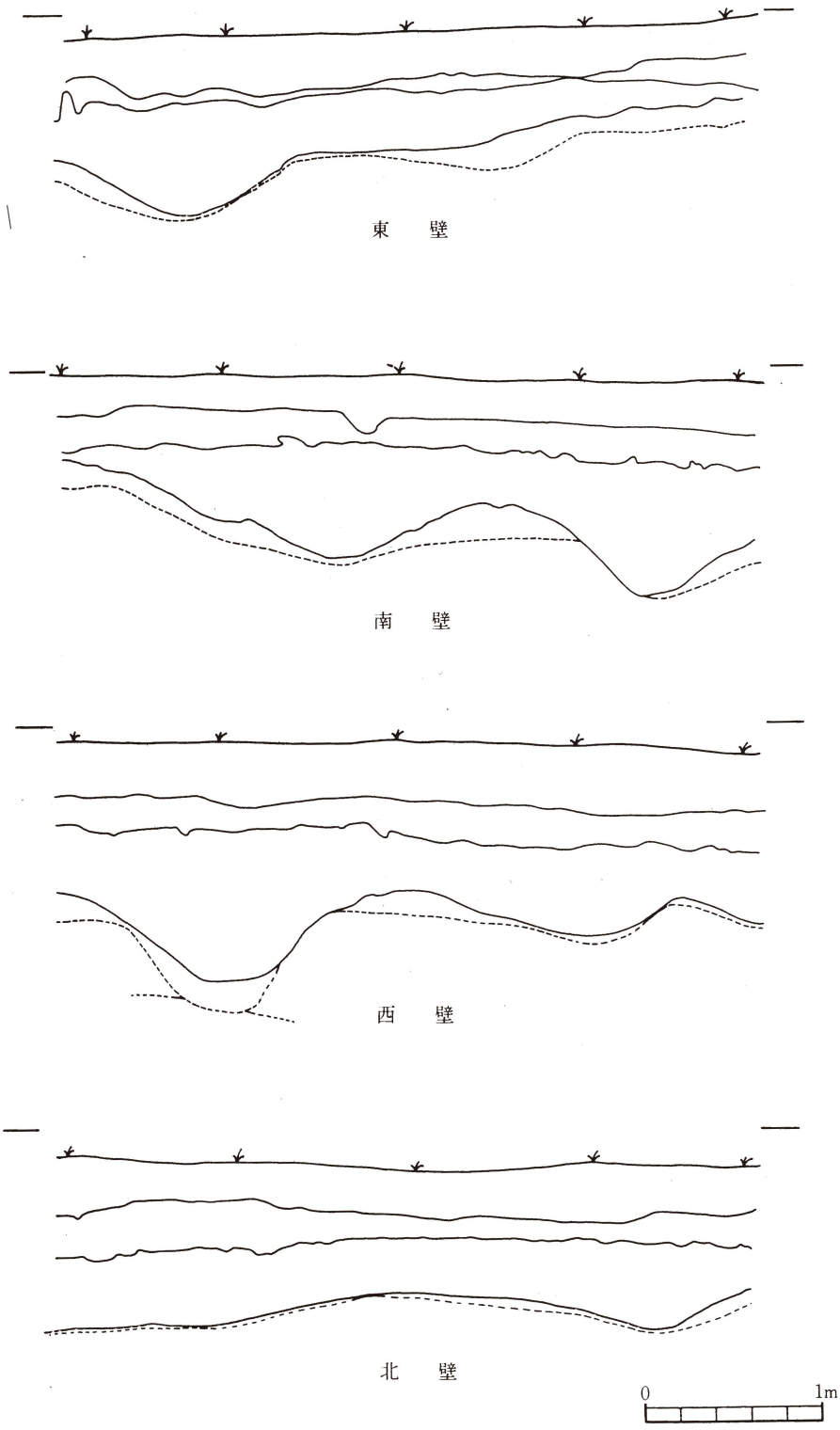
(4) 今回の調査の大きな眼目の一つであった，爪形文土器に伴う石器の種類を明らかにすることについては，全く資料を得ることが出来なかったといってよい。小さな石片若干が検出されたが，これをもって何か確定的なことをいうことはできない。この石片が出土したということが，あるいは，沖縄本島と異なった石器が伴うことを暗示しているのかどうか。あるいは，別の地点に石器が存在しているのかどうか，すべては今後の調査にゆだねられている。

(5) 自然科学的な検査の結果，白色クール層の下位から発見された黄褐色砂質土層に，アカホヤ火山灰が包含されていることが確実となった。アカホヤ火山灰層と白色クール層との間には，土壌化した砂層が存在している。このことは，アカホヤ火山灰層の堆積時期と遺物包含層の堆積時期との間に，ある程度の時間差を想定しなければならないだろう。喜子川遺跡の爪形文土器は縄文時代草創期というような，古い時期のものではないであろう。

(6) アカホヤ火山灰層の下位にあるマージ層のなかから石片（頁岩様）を採集した。これが石器，あるいは石器製作の際の石屑であるのか，なお不明である。今後一層の資料の収集と分析が必要である。

以上で田村の考えを終えるが，最後に，今回の調査の直前に亡くなられた三上先生の御冥福をお祈りし，あわせて調査に参加された諸先生や学生諸君に対し感謝の意を表する。また，調査費を援助して下さった，財団法人高梨学術奨励基金の御好意に心から感謝する次第である。

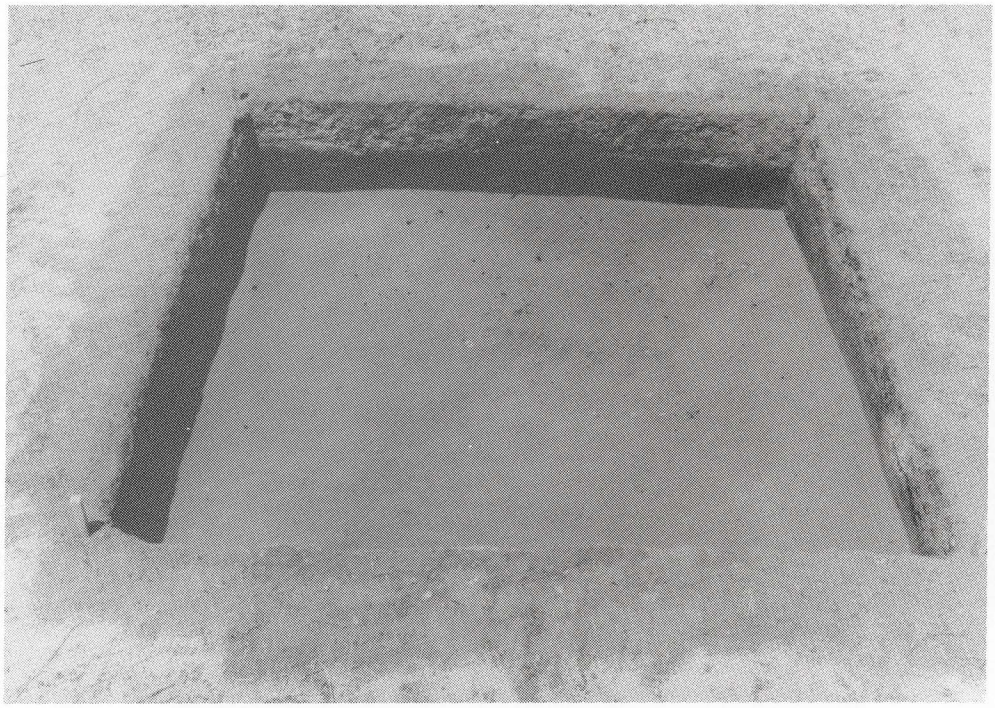
注1．沖縄のヤブチ式土器についてはすでに三島格氏が縄文後期まで認められていると延べている。
「沖縄大百科事典」沖縄タイムス社　1983年



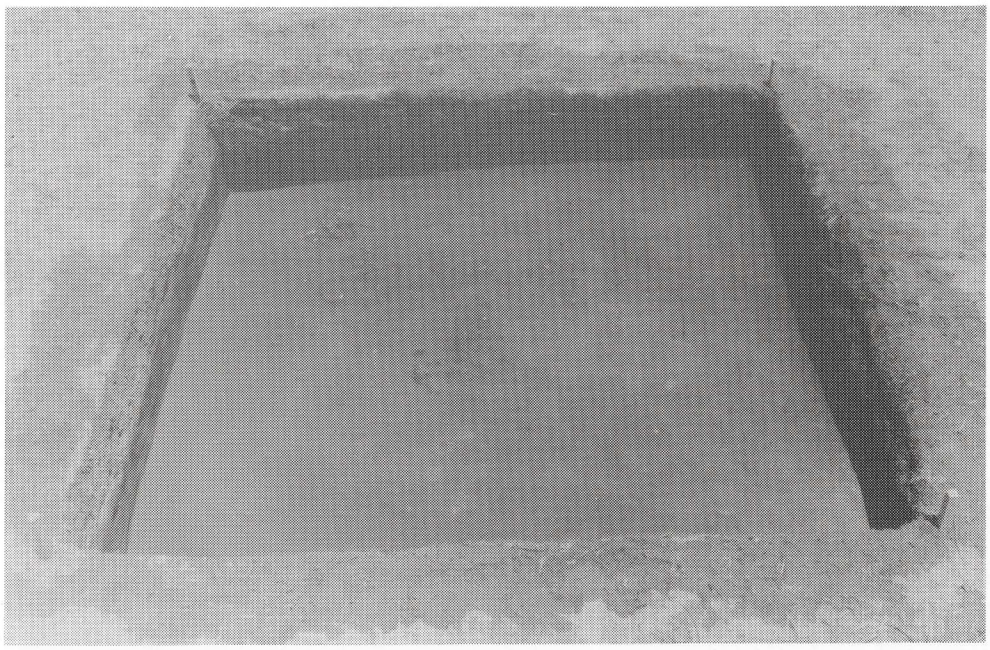
第　図　C－2 グリッド土層断面図

↑遺跡遠影

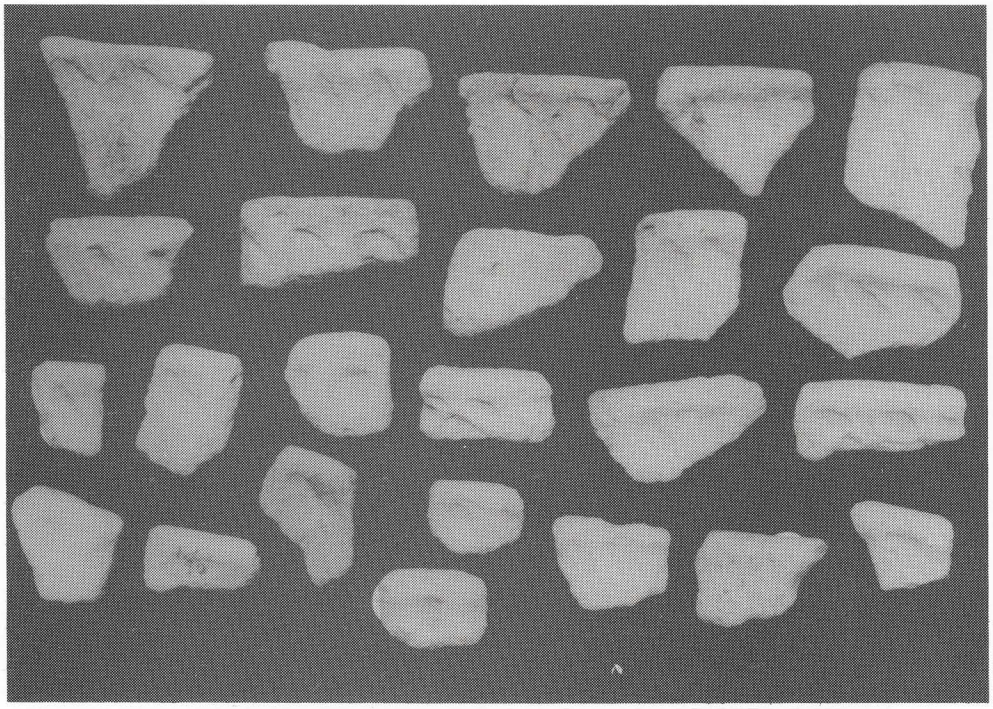
←調査グリッド（南側から）



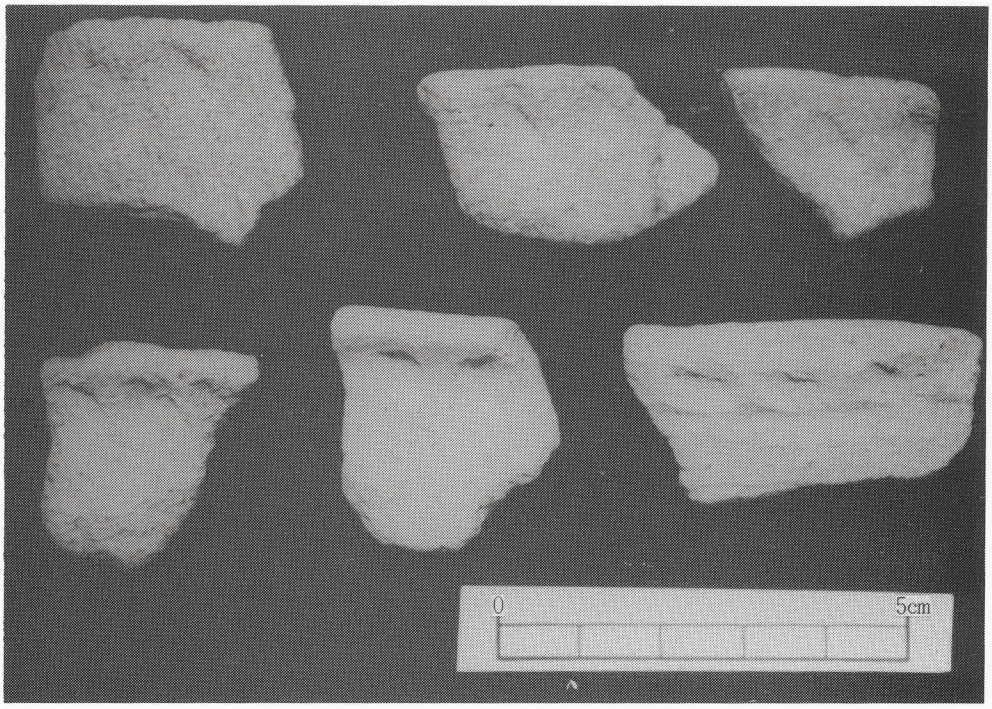
C－2　グリッド遺物出土状況



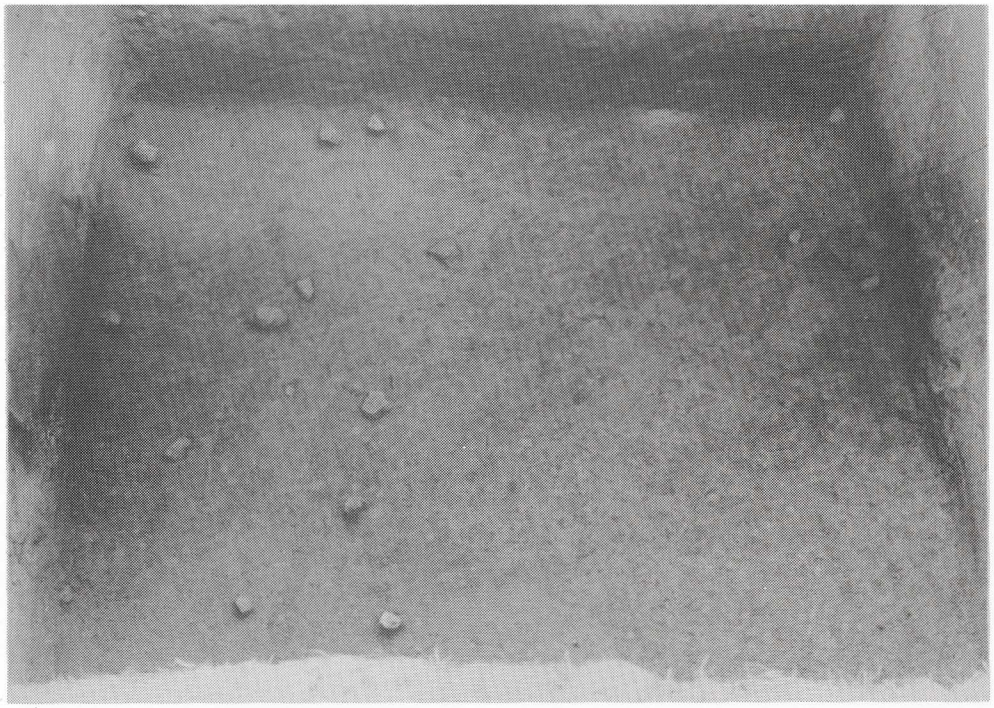
C－2 グリッド遺物出土状況



爪形及土器 口縁部

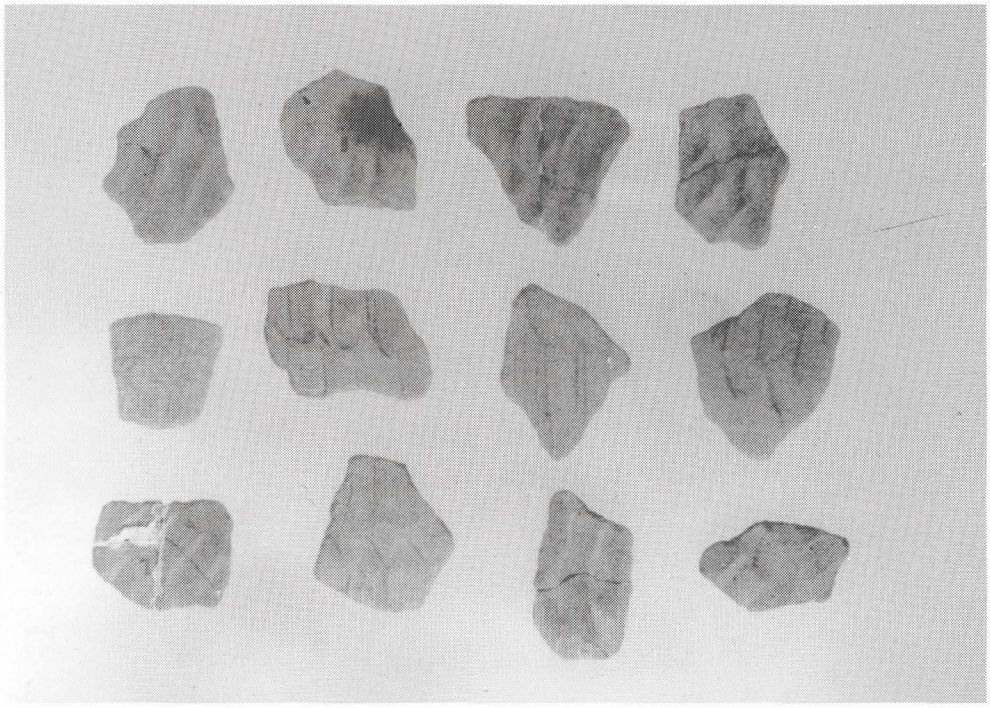


爪形及土器 口縁部

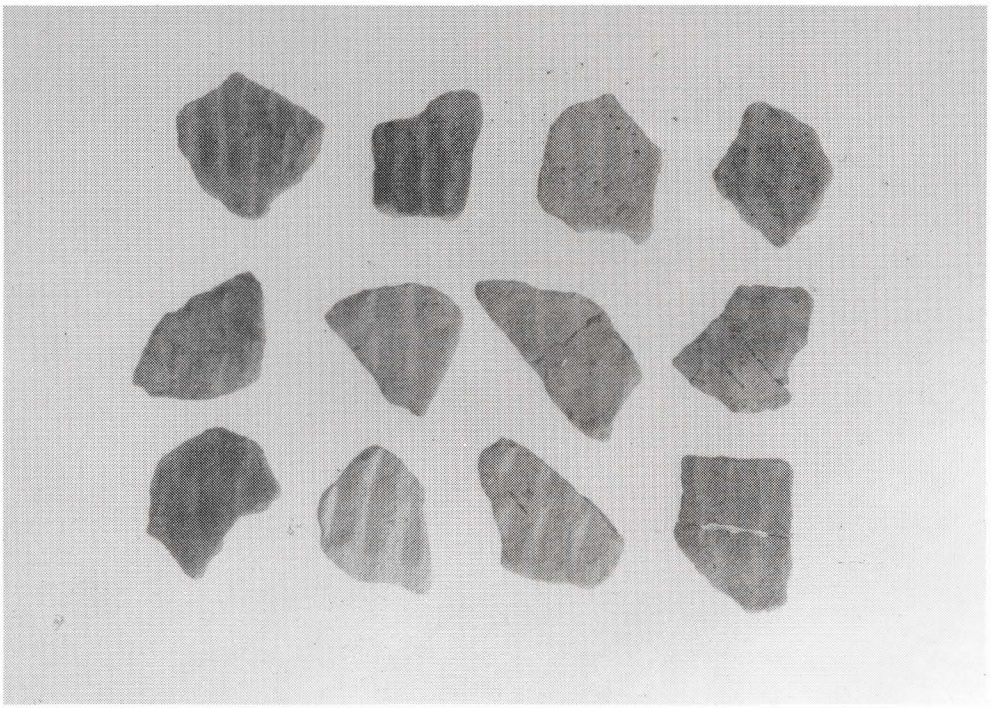


グリッド　層 出土状況

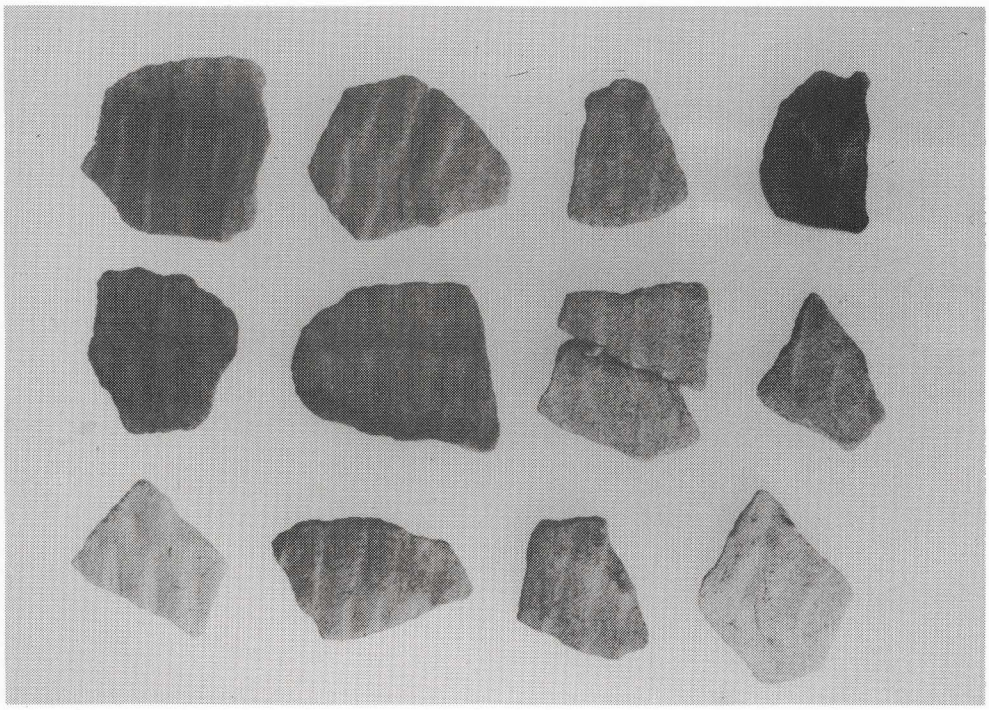
発掘調査メンバー

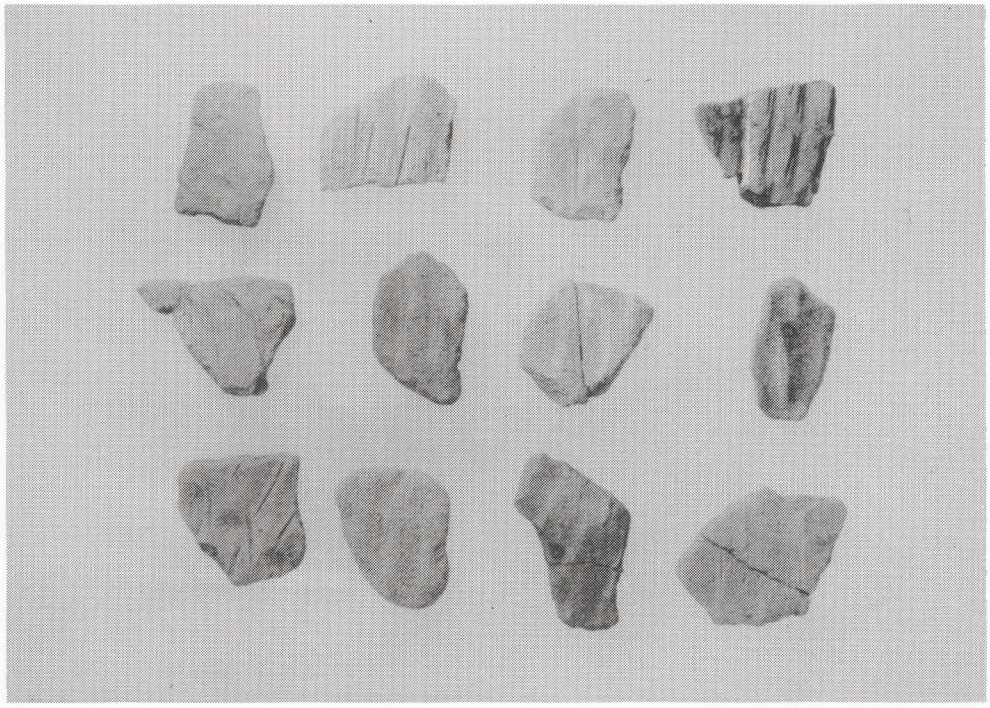


1 類 土 器（A）

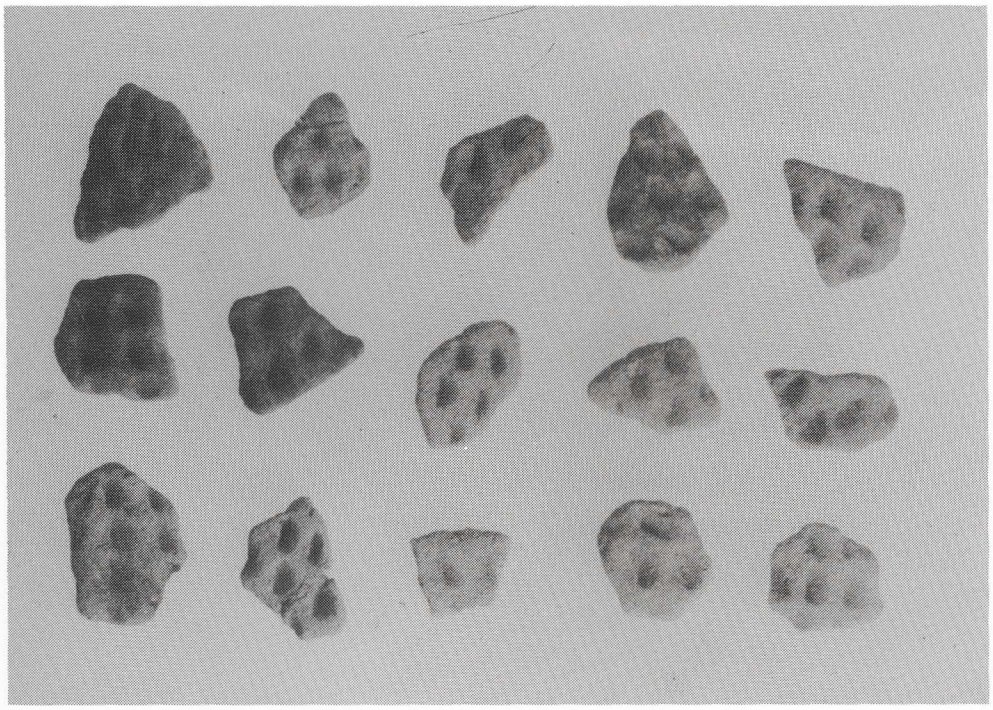


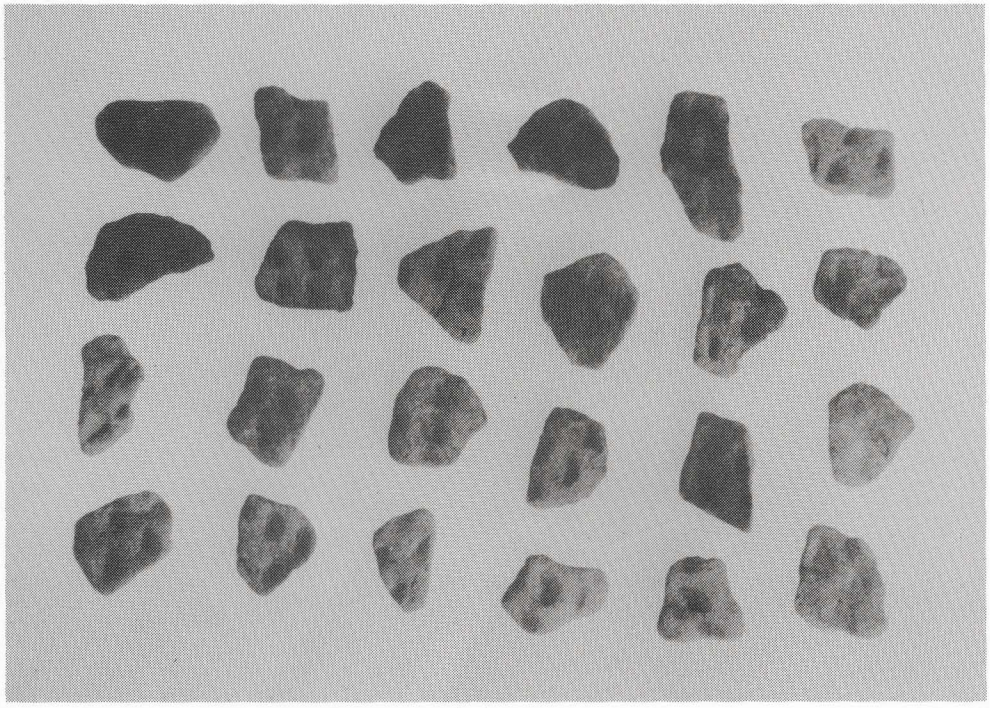
1 類 土 器（B）



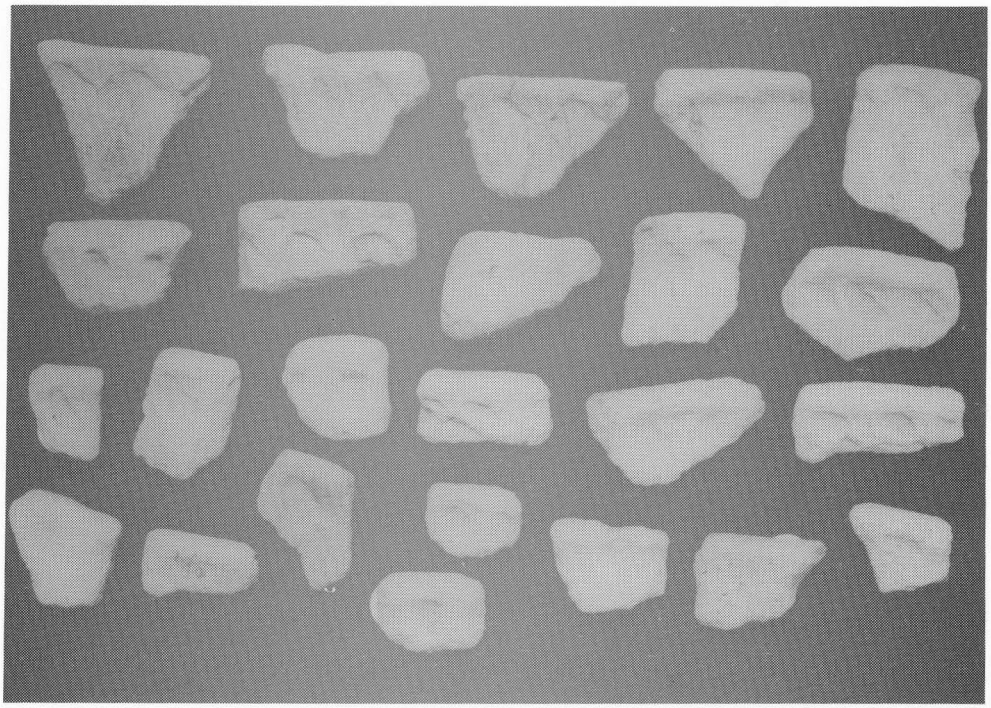


2 類 土 器

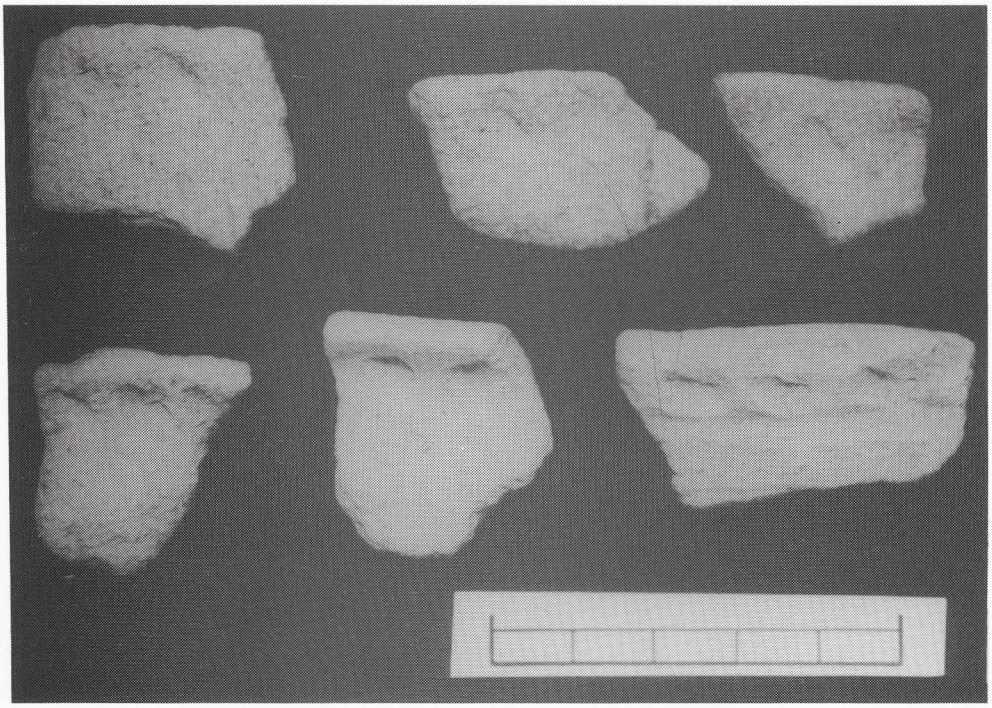


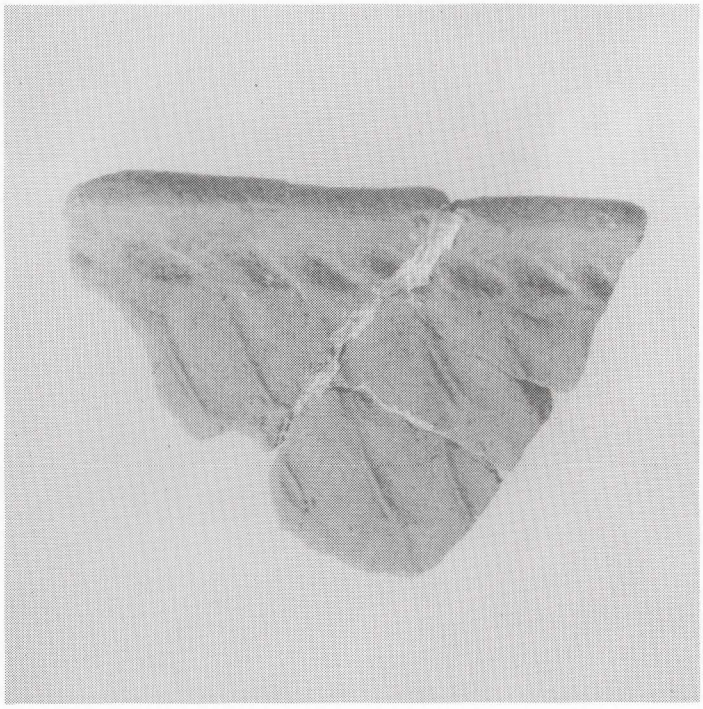


3 類 土 器



土 器 口 縁





土 器 口 縁

その他の土器

喜子川遺跡

1988年3月

住　所　鹿児島県大島郡笠利町須野
笠利町歴史民俗資料館内
TEL (0997) ⑥③ 9531

編集
発行　笠利町教育委員会

印刷所　鹿児島市春日町12番16号
中央印刷株式会社
TEL (0992) ④⑦ 3300